340 | 2020 春
[￥500] 年4回発行

JVC
Japan International Volunteer Center

TRIAL & ERROR

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

人々の足元から社会を変えていく。いままでも、これからも。

1980 → 2020
JVC40周年記念号

人々の足元から
社会を変えていく。
いままでも、これからも。
1980 → 2020

２０２０年２月27日、ＪＶＣは40周年を迎えました。
「立ち上げた当時と比べて、世界は住みやすい状況なのか？」
世界を見渡してみると、残念ながらそうではない現実があります。

暴走する新自由主義経済の影響で分断される社会、
国内外で高まる排外主義。
40年前のＪＶＣのスタッフ、ボランティアは、
利害や打算とは関係なく、
タイの難民キャンプにまず飛び込んでいきました。
私たちもその思いを持ち続け、
どこに向かえばよいのか不安なこの時代だからこそ、
どんな社会をつくるのか、
実践を通じて現場の人たちと共に考えていきます。

日本国際ボランティアセンター　事務局長
長谷部 貴俊

もくじ

4　活動地のストーリー「いま、あの場所では」
ラオス・アフガニスタン・モザンビーク・東京
8　チャートで見るＪＶＣ

10 **JVC発足から40年**
世界の変化にどう対峙してきたのか（熊岡 路矢）

14 **それぞれの現場から**
抑圧下で小農が続ける実践、自己決定と連帯（渡辺 直子）
コミュニティには力がある
だから与えるよりも共に模索を（岩田 健一郎）

18 **JVCとともに歩む理由**
―現場を訪ね、協働を重ねるパートナーから―
カンボジアでの豊かな出会いから考える「枠」を超えた共生
（株式会社童話館 廣瀬 文女）
対話と試行を重ねながら共に発信するパートナーとして
（「8bitNews」代表 堀 潤）

20 **特別座談会（星野昌子×現役スタッフ）**
「世代を超えて受け継ぐ、JVCのDNAとは」

26 **変化のストーリー「人は変わることができる。」**
アフガニスタン：サビルラ・メムラワルさん（加藤 真希）
平壌：チョさん（宮西 有紀）

28 **JVCの未来を決める！**
「ゼロベース」で新たな取り組みを（今井 高樹）

30 **「いま、なにしていますか？」**
スタッフOB／OGの現在

32 **今回の「欄外100字メッセージ」が面白すぎたので**
かじのさんにイラストを描いてもらった

33 **編集部からのお願い**

34 **激動の時代をT&Eとともに歩んで**（大野 和興）

35 **お知らせ**

活動地のストーリー
「いま、あの場所では」

森林保全
ラオス

日本と同じく、国土の約60％を森林が占めるラオス。農村部の人々の多くは森の豊かな恵みに根ざして暮らし、彼らが農地や森林を利用する権利は、ある程度が法律によって保証されています。一方、ほとんどの村にはその利用を証明する書類がなく、住民には大規模農園や鉱山、ダム開発をもくろむ企業などによる土地収奪に対抗する手段がありません。そこでＪＶＣは村人と話し合い、村の境界や森林の位置を示した地図を作り、森の利用規則を定める支援を行いながら、村人による森林保全のモデルをつくり、政府やＮＧＯにも示そうとしています。

トンサイさん（45歳）

私の住むラオス中南部サワンナケート県のノンハン村では、みなで農業を営みながら、森の恵みに支えられた暮らしを営んできました。森からはタケノコやキノコのほか、籐の芽やリスやウサギなどの小動物を採ってきて食べたり、さまざまな薬草を使ったりしてきました。

人口が増え、次第に森が減っていくなかで、1997年、村人同士で保全を始めたのが〝ドンクワンの森〟です。手書きの地図も規則もありますが、近年、近隣の村で企業によるプランテーションの進出と土地の収奪などが起こるのを目にして、不安を感じていました。

今回、ＪＶＣの支援でＧＰＳを使った正確な地図を作り、郡役所にも登録をすることができると聞いています。これによって村人の意識も高まると思うし、外部から森林利用の申し出があった際にもこれらを活用することで、みなで対応を検討することができると思います。

幼い頃ころ両親に教わった、森の豊かさ。私の子どもたちにもこの森を伝えていければと思っています。

識字教育

アフガニスタン

非識字人口が多い、ナンガルハル県クズ・クナール郡。男女の区別なく学ぶ機会をつくることで、地域、そして次世代に教育の大切さを伝えていきたい――そんな思いから、JVCは15歳以上を対象にした識字教室を開いています。

9ヵ月でパシュトゥ語の読み書きと算数を学び、小学校3年生に相当するレベルを目指します。先生を務めるのは、地元出身の方々。村全体で支える協力体制をつくり、教室だけでなく、子どもたちの就学や中途退学を防ぐための啓発にも取り組んでいます。

マータバさん（40歳）

この識字教室の先生であるラジーアは、実は私の娘です。

私も10代の頃、学校に行きたかった。けれど治安が悪すぎて、その夢は叶いませんでした。だから自分の子どもには、自分のような思いをしてほしくない。私には10人の子どもがいますが、娘たちも学校に通わせて、その分の家事は私一人で担いました。ラジーアはとても優秀な成績で高校を卒業しました。

2018年にJVCが私たちの村で識字教室を開始したとき、ラジーアは教員に応募し、採用されました。そして私に言ったのです。「お母さんはずっと読み書きを勉強したいと言っていたね、でも私たちの教育のために自身を犠牲にしてきた。私はお母さんのおかげで〝教育を受ける〟という自分の夢を叶えたの。今度は私に、お母さんの夢を叶えさせて」と。

そうして私も遅ればせながら、娘が教える教室で、文字を学びました。いまでは自分の名前も書けるし、アルファベットも数字も読めるようになりました。

アドボカシー活動
日本・モザンビーク

日本政府がブラジル政府と共にモザンビークで行うODA事業「プロサバンナ」。広大な土地を大規模に開発することで、約400万人の農業従事者が豊かになる…そう喧伝される事業に対し、現地の小規模農家たちは2012年から反対の声を上げ続けています。しかしモザンビーク政府による脅迫や抑圧、JICAの現地市民社会への介入・分断はあとを絶ちません。

彼らの懸念や指摘、そして未来へのビジョンに共感したJVCは、その声を日本政府に伝え、またフィールドや文献調査を行っています。不公正・不条理をもたらす社会のあり方を問い、政策を変えるため、現地の人々と共に活動を続けています。

コスタ・エステバンさん（53歳）

今モザンビーク北部で行われているプロサバンナ事業は、「悲しみの開発」です。「犠牲を伴う開発」とも言えるでしょう。私たちにそんな開発は必要ありません。私たちが欲しているのは「幸福のための発展」です。私はここで何十年も土地を耕してきました。私たちは誰かに押し付けられるのではなく、自分たちの実践に根ざした発展を求めているのです。

小農は地球の守護者です。私たちは自分のためでなく、子どもたち、次の世代のために闘っています。そして、私の国のすべての同朋、小農たちのために闘っています。

日本政府（外務省・JICA）はこれまで、私たちの声に耳を傾けず、私たちを仲間から分断してきました。そのことがもたらした心の痛みを訴えても理解しようともせず、事業がいかに利益をもたらすかを一方的に語り続けています。でも、私たちが求めているのは利益ではなく、権利、主権そして尊厳なのです。日本の皆さん、あなた方には一体何ができますか？

国内でのボランティア活動

東京

1981年、杉並区の小さなスペースにオープンしたJVC東京事務所は、数えきれないほどのボランティアに支えられてきました。「自分にできることで活動の最前線を支えたい」と願う意志ある人々が、事務所が秋葉原に移転した今でも集います。

平日夜に集まって勉強会や資金調達の企画を練る、各国ボランティアチーム。発送作業や寄付品の整理をしてくれる、昼間のボランティアの皆さん。語学や経理など、得意な分野でスタッフの作業を担う方々もいます。形は少し変わっても「ボランティアセンター」であり続けているJVCは、皆さんのお越しをお待ちしています。

後藤 美紀さん（24歳）

マザーテレサを知った小学生の頃から「自分にもできることはないだろうか」と思っていました。でも「国際協力」は壮大で手が届かないものに見えて、たくさん勉強しないとできないと感じていたんです。そんな私は友人の誘いで、JVCのボランティアから一歩を踏み出すことになりました。

記事を英訳する作業の中で、パレスチナの現状を初めて知りました。「21世紀の今もこんな差別があるのか」と驚き、現地にも足を運んだ私が見たものは、日本人にはフレンドリーなのにパレスチナ人に冷たい、占領側のイスラエル兵。生まれた時には皆「普通」なのに、立場によって視点や意識が固まってしまう…何が彼らをこうさせるのか、モヤモヤしています。私にはまだ核心が見えていないかもしれないけれど、頑張って、長く付き合っていきたい。ちっぽけな私でも、知ることから、何かできるかもしれない。「初めの一歩」は思っていたよりも簡単で、思った以上のものが返ってくるんだ、今はそう思っています。

チャートで見るJVC

受賞歴

1985年 **アフリカ被災民救援活動貢献についての感謝状（外務大臣）**

1988年 **国際協力推進についての感謝状（外務大臣）**

1988年 **東京弁護士会人権賞（東京弁護士会）**

1989年 **朝日社会福祉賞（朝日新聞社）**

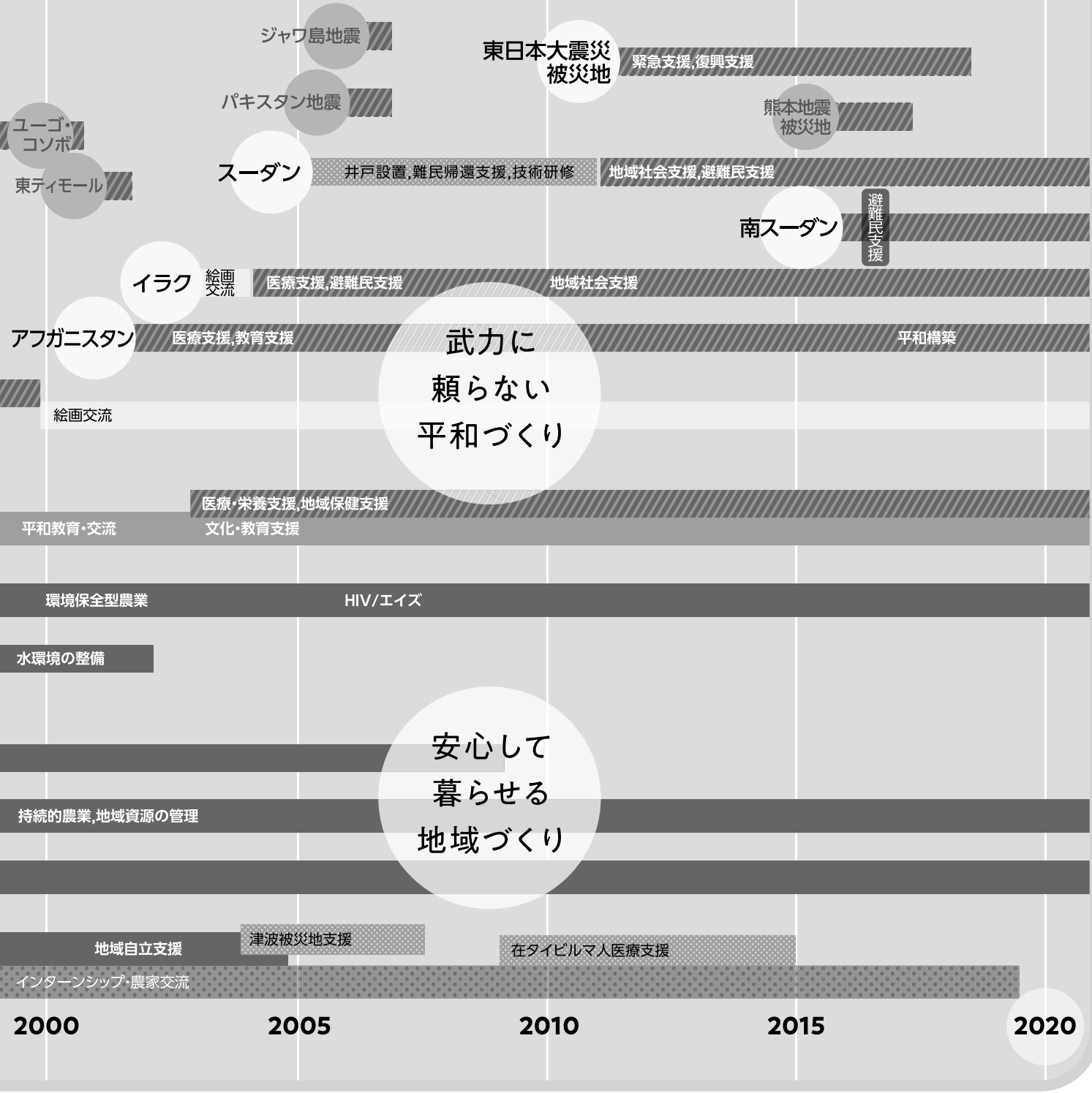
1992年 **毎日国際交流賞（毎日新聞社）**

1995年 **内閣総理大臣賞（内閣総理大臣）**

2012年 **旭日小綬章 星野 昌子（個人として受章）**

2015年 **日本平和学会 平和賞**

2018年 **第9回沖縄平和賞**



現地における活動のダイジェスト

タイ・カンボジア国境の難民キャンプで活動を開始

エチオピアでの飢饉に対して医療支援を実施。その後ソマリアでも活動し、活動範囲をアフリカにも拡げた

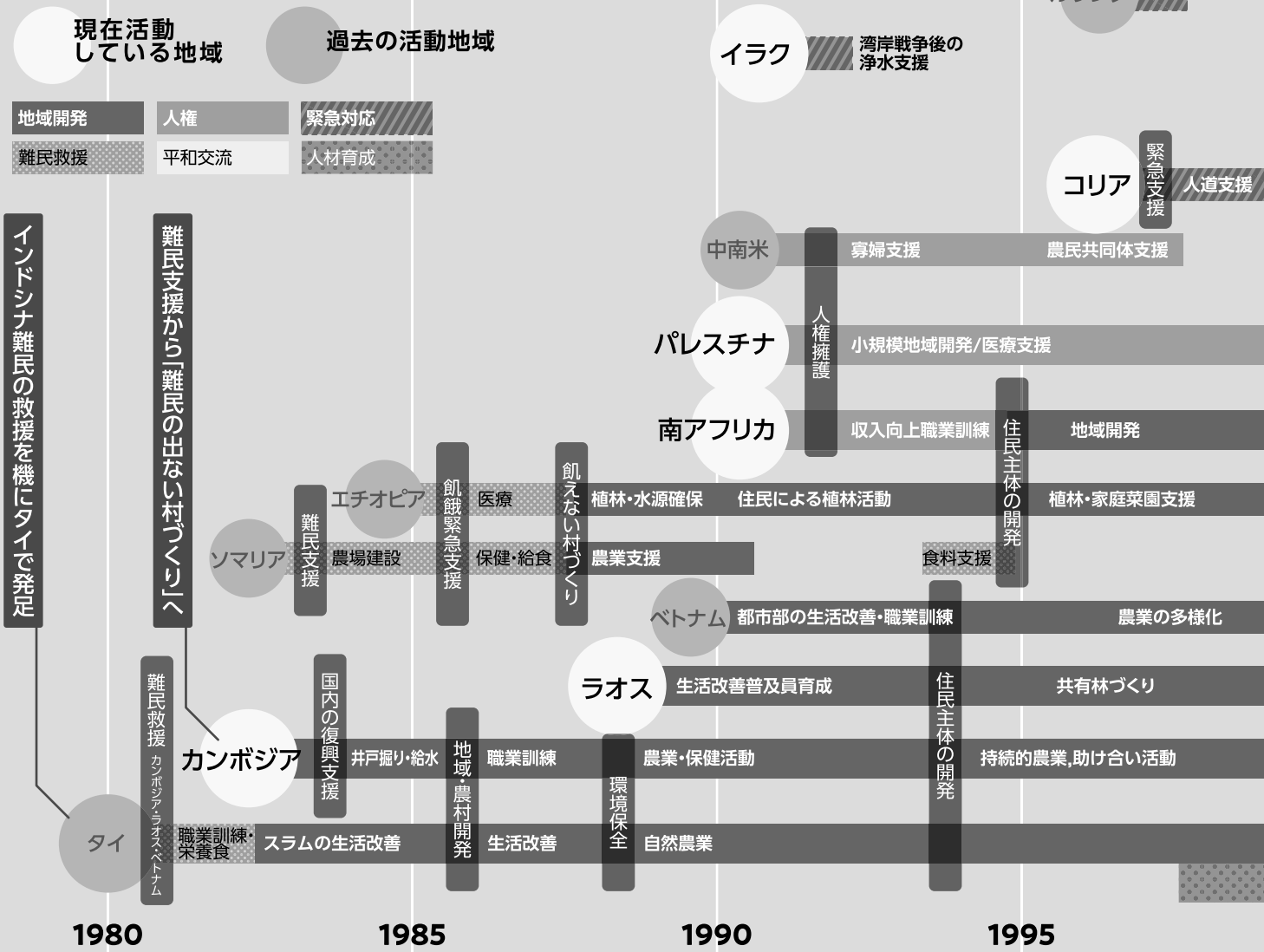
パレスチナや南アフリカにおいては、占領や人種差別に苦しむ人々への支援を開始

アジアやアフリカにおいて、環境に配慮した農業と相互扶助を軸とする地域開発活動に注力

9.11後、アフガニスタンにおいて医療支援を展開。前後して各地で人道支援活動も展開するように

東日本大震災では被災地(気仙沼市／南相馬市)での復興支援活動に尽力

40年の歩み



私とJVC

1982年。インドシナ難民の人たちの困窮に気づく。何かしたいという思いで日本赤十字社に電話、日本奉仕センター（当時の団体名称）を紹介され、JVC京都連絡事務所に足を運び始めたのが始まり。一人ひとりの顔が浮かぶ。　嶋 紀晶［元理事］

JVC発足から40年 世界の変化にどう対峙してきたのか

1980年、タイのバンコクで産声を上げたJVCは今、11か国・地域での活動を展開するが、どの活動も世界情勢に翻弄される人びとに寄り添うために始まっている。つまり、JVCの活動から、この40年間で世界が、日本がどう変わってきたのかも見えてくる。JVC設立から2006年までJVCで活動した熊岡路矢が40年を総括した。

JVC元代表　熊岡 路矢

◎1980年 インドシナ難民救援活動および、JVCの立ち上げに参加。◎1981～1982年 UNHCRシンガポール・ボートピープルキャンプで活動。◎1982年 JVCバンコク事務局長。◎1985年 JVCカンボジア代表（井戸掘り活動、技術訓練、孤児院支援など）。◎1990年 JVCベトナム（～1994年）◎1995～2006年 JVC代表／代表理事 ◎2007～2009年 UNHCR駐日事務所アドバイザー、東大大学院特任教授、現職：日本映画大学特任教授。難民審査参与員。JVC顧問。

著書（単著）：『カンボジア最前線』（岩波新書。1993）、『戦争の現場で考えた空爆、占領、難民』（彩流社。2004）、共著多数。

2020年4月初め時点で、新型コロナウィルス感染症は世界、日本で速く広く深く蔓延している。健康・生命の問題と、経済社会的文化的な「命」とが二重に脅かされている。仮にこの災厄が収束しても世界の景色は大きく変わる。過去を振り返ると同時に、JVCを含む国際協力NGOは次の数十年に向け強力な思想と適応力を備えなければならない。

序章――――1980年前後の日本、そしてタイ／東南アジアと世界

1979年後半から、カンボジア難民、そしてベトナムの「ボート・ピープル」難民、およびその救援は大きな関心事となり、日本でも多くの人の具体的な活動へとつながった。メディアで「難民救援ブーム」という言葉さえ使われたが、人々を動かした理由には以下のことがある。

①難民の窮状と伝えたメディアの力

79年1月、カンボジアの「民主カンボジア」政府（ポル・ポト首相）が、隣国ベトナムの軍20個師団の攻撃で倒され、その後、食糧と水や政治的自由を求めるカンボジア人が地雷原を越えようとして死傷する凄惨な様子が報道された。そうした難民の姿と表情、言葉、思いは、日本、世界の多くの人々の心を動かした。

②戦争の記憶

多くの国では、その5～10年前までのベトナム戦争での米軍の空爆や戦闘行為で苦しむベトナム／インドシナの人々や、同時期の「反戦」運動を鮮明に記憶していた。日本でも、戦場であれ銃後であれ、戦争体験者が50代前後で、社会の中軸にいた時代でもある。

③国際的な動きにタイと日本も動く

79年7月、国連は「国連インドシナ難民国際会議」で、本来の個人審査で認定すべき難民認定ではなく、インドシナ3国（カンボジア、ベトナム、ラオス）に関しては、「層」として出てくる人々を準難民として保護することを決定した。

さらに、経済的余裕のある西側諸国は、「第三国」として難民定住を認める決定もしたことから、日本もようやく難民条約を批准。日本史上初めて大規模に難民を受け入れた（外務省資料

によると1万1319人)。

タイでは、国連の人道支援専門機関(UNHCR、ユニセフ、WFPなど(注1)、および米国など西側諸国が活動支援、資金支援の実施を表明。この条件下でタイ政府はカンボジア難民の受入を開始し、カオイダン、サケオなどでの難民キャンプ開設を決定した(正式には79年10月)。

第1章――80年2月27日 JVC創設

79年以降、各国のNGOが、特にタイ・カンボジア国境地帯の難民キャンプで活動を開始するが、同年後半からは、日本から個人ボランティアや小規模グループなど約200人が自発的にそれら活動に参加した。

79年秋、緒方貞子氏(上智大学教授。91年から国連難民高等弁務官)のタイへの特別視察ミッションに通訳・案内役として同行した星野昌子さん(JVC初代事務局長)は、タイ政府から、「国境地帯に集まる日本人をまとめる団体の創設を」との相談を受けたと語っていた。その背景には、善意はあるが、英語、タイ語などを活用できないことで集合的な救援活動に入れないという事情があったようだ。

ラオス・タイ在住15年におよび、英・仏語、ラオス語、タイ語が堪能な星野さんは団体の必要性を強く感じ、在タイ日本大使館や日本人会との相談を重ね、80年2月27日に創設したのが日本奉仕センター(JVC)である(その後、日本国際ボランティアセンターに改称)。同年、日本でもJVC東京連絡事務所が開設した。

創設当時、JVCに集うボランティアのタイでの平均活動日は約1週間程度。1ヵ月の活動者は「長期ボランティア」と呼ばれた。言い換えれば、専門家的活動には携わらず、欧米のプロNGOからもれる「落穂ひろい」的な活動が多かった。

その後、医師、看護師、栄養士、技術者、日本語教師などのプロが集まり、活動プログラムも徐々に高度化、専門化する。たとえば、カオイダン難民キャンプでの「井戸掘り給水プログラム」「技術学校」、国境の難民村での「母子補助栄養食プログラム」など。他方、活動は、都市スラムでの地域開発活動にも広がり、東北タイでの農村開発にもつながった。

80年代のJVCは一NGOでありながら、日本の多様な市民団体、福祉団体、宗教系団体などと交流・協力し、これら団体からの活動者・見学者も幅広く受け入れる一つの「協議体」でもあった。また民間、政府機関、メディアなどからの認知度も高く、当時の「社会現象」になったともいえる。

第2章――80年代の世界と日本。そしてNGOの位置

(1) 1979年

79年は、2020年の現在につながる大事件が連続して世界で起きた年であった。以下、列記する。

①1月。ベトナムがカンボジアのポル・ポト政権倒壊(前出)。その後の40年間の東南アジア情勢に大きな影響を与えた。

②1月。イランではホメイニー師と宗教革命派が「反王朝、反米」の大衆行動を成功させ、米寄りのモハンマド・レザー・シャー皇帝を追放。

11月には、皇帝の米国亡命に怒った宗教革命派の学生たちが、米国大使館を1年強も占拠。この事件は、両国の敵対関係を決定的にした。今年1月の両国間での開戦を匂わせた対立も79年に根がある。

◎注1…UNHCR=国連難民高等弁務官事務所。ユニセフ=国連児童基金。WFP=国連世界食糧計画。

世界と日本(現代政治史) JVCの歩み

通常文字 = 世界のできごと
囲み文字 = 日本のできごと
太字 = JVC関連のこと

1945年	第二次世界大戦終了
1950〜70年代	米ソ対立=冷戦構造、局地・代理戦争激化(ベトナム戦争、中越戦争など)
1979年	ベトナム軍侵攻→ポル・ポト体制崩壊/国連インドシナ難民国際会議/イラン・ホメイニ革命/イラク、サダム体制/ソ連アフガニスタン侵攻
1980年	**2/27 JVC創設。タイ・カンボジアの国境の難民キャンプで活動開始/バンコク・スラムでの住民支援活動開始**
1980年代	アフリカの飢餓・飢饉(ソマリア紛争・エチオピア飢饉)
	日本、難民条約批准(81年)→インドシナ難民支援・受入
	ソマリア、エチオピアでの緊急・復興・開発支援(83〜)/国内でのインドシナ難民支援
1989年	第2回国連インドシナ難民国際会議
1991年	冷戦体制崩壊
1990年代前半	カンボジア和平協定/湾岸戦争/リオ環境・開発会議/グローバリゼーション加速
	アフリカ開発会議(TICAD)開催
	カンボジア復興/湾岸戦争後のイラク・バグダッドなどで支援活動/南アフリカで住民支援 アパルトヘイト撤廃(94年)
1990年代後半	ユーゴスラビア紛争 **セルビア、コソボでの救援活動**
	NGO・外務省定期協議開始(96年)/NPO法施行(98年)
	環境に配慮した農業と相互扶助を軸とする地域開発に注力/開発・平和への政策提言の重視
2000年代前半	国連ミレニアム宣言/9・11事件/米英軍アフガニスタン侵攻/イラク戦争/パレスチナなど中東状況悪化
	アフガニスタン・イラクへの自衛隊派遣
	アフガニスタン、パレスチナ、イラク、スーダンなど紛争地での人道支援を開始・継続/「対テロ戦争」への批判
2010年代	シリア内戦→大量の難民流出/「アラブの春」
	東日本大震災(11年)
	東日本大震災被災地支援(気仙沼・南相馬)
2020年	新型コロナウィルスの世界的感染拡大

「なぜ女性に重い物を持たせるのか」の質問に「女の尻がでかいのは、重い荷物を運ぶため」と答えたエチオピア人。「日本みたいに金と物があれば幸せになれる」というベトナム人。1年に3万人もの人が自殺する国は幸せですか？　伊藤 達男／幸子　［農業・農村開発に従事。エチオピア86年～、ベトナム93年～］

③7月。イラクでサッダーム・フセインが大統領と革命指導評議会議長に就任。翌80年には、反米革命直後で体制脆弱なイランに戦争を仕掛ける（イラン・イラク戦争）。イラクは、欧米、ソ連、アラブ諸国の支援を、イランは、中国、シリア、リビア、北朝鮮から支援を受け、88年の停戦まで両国ともに100万人単位の犠牲者を出した。

④12月。ソ連軍がアフガニスタンに侵攻。だが、地元ゲリラに加え、米国やサウジアラビアに支援されたイスラム系ゲリラによる反ソ連攻撃で大きな打撃を受けた。これは、86年のチェルノブイリ原発事故、80年代の経済不調とともに、ソ連邦解体の素因となった。アフガニスタン情勢は、01年の米軍侵攻の時代も挟み、今日も極めて不安定である。

（2）1980年代のJVC。冷戦の時代に国境の両側で活動する。

そして80年代、世界はデタント（緊張緩和）の時代から米ソ対立の時代に入る。その「冷戦」の象徴の一つが、ソ連のアフガニスタン侵攻であり、米国のアフガニスタン内の反ソ連・ゲリラ支援だ。インドシナでも、カンボジア侵攻したベトナムに、東側勢力のソ連・東欧圏は支援を続けたが、米国など西側勢力は経済封鎖や援助拒否など厳しい締め付けを行った。

その冷戦構造のなかで、国際協力NGOは、本来の政治的中立性を守りつつ、紛争地での困難な人道支援と難民救援を続けた。

だがインドシナに関しては、タイを中心としたASEAN諸国に「出てきた」難民を救援する組織と、かたや難民を「出している」インドシナ3国内で働く組織への風向きは違った。

たとえば、難民救援側には、国連や西側諸国（欧米、カナダ、日本など）の支援はあつく、資金は年間数百億円に達した。他方、インドシナ3国には、国連も西側諸国も援助と経済関係を拒否。3国には欧米のNGOも少数入ったが、難民救援側と比べると、集まる支援や資金は1％程度であったろう。

このときJVCは、日本社会からの広範な支援（資金支援、人の派遣など）を受け、政治的中立性に基づく積極的行動として、この構造・国境の両側で活動する方針をつくった。タイおよびASEAN（当時）諸国の反発もあったが、難民を出す側のインドシナ3国内の活動を模索し活動を開始した。

政治的中立性の課題も重要だが、政治体制が反発しあう国境の両側での活動は、岩崎駿介さん（元代表）が言う世界の「構造的理解」と、地域と紛争に関する具体的立体的な知見をもたらした。

80年代は、世界と日本が、そしてJVCが、飢餓問題などアフリカに目を向けた時期でもある。

冷戦構造下の東アフリカ（「アフリカの角」地域）で、JVCは、83年のエチオピアの飢餓に関わる医療活動を開始し、隣国ソマリアでも、紛争で遊牧の範囲を狭められた遊牧民と共に農業での半定住を模索する活動を行った。

第3章――――
90年代のJVC

（1）冷戦の終結

90年代は、「ベルリンの壁」崩壊（89年）を象徴に、ソ連・東欧圏の体制が崩れ、ソ連邦が解体し、インドシナ／東南アジア、「アフリカの角」地域における冷戦構造の崩壊から紛争解決の希望が見えた時期でもあった。米ソ対立時代に費やされた世界の巨額軍事費が、今後は貧困削減、環境保全、紛争解決への「平和の配当」として使われるとの期待は大きかった。

ところが実際に起きたのは、「唯一の超大国になった」との自己認識をもった米国を中心に、「援助競争」が不要になった状況から、多国籍巨大企業中心のむき出しの利益主義（新自由主義体制）、金融・経済・情報を中心とする「グローバル化」の進行だった。その結果、世界中で貧富の極端な格差が生まれた。

20年1月20日のOXFAMの発表によると、世界の最富裕層2153人は最貧困層46億人（世界人口の60％超）よりも多くの財産を保有している。

（2）新しい局面を迎えたJVC

90年のイラクのクウェート侵攻をきっかけに翌年「湾岸戦争」が勃発。それまで、イランとの対抗上、イラクを支援してきた米国とソ連などが揃ってイラク攻撃を行った。

JVCは、「湾岸戦争」終了後、世界と日本のNGOの多くがクルド人地域を支援するなかで、あえて空爆、敗

戦で困窮するイラクのバグダッド市および周辺部の人々への支援を決めた。また、91年のイラク空爆で大量使用された「劣化ウラン弾」由来と推定される子どもの白血病多発は、03年以降の小児がん・医療支援活動につながる。

アフリカでは、JVCは80年代に続き90年代、自然環境を守る農業、相互扶助を軸にする農村開発活動を展開。エチオピアでは、医師である林達雄さん自らが、食物確保と自然環境保全の両立を提案し、実施した。

他方、JVCも関わることになる、パレスチナ・イスラエル対立、朝鮮半島の分断という紛争は、冷戦後も解決しないまま今日まで続いている。

第4章――2000年代の世界。人道支援活動が困難に。

99年から2000年にかけ、旧ユーゴでの90年代における激しい民族対立型の戦争が一定の収束をみるなかで、貧困削減を骨子とする「ミレニアム開発目標」が国連の会議を通し制定され、国連・各機関、各国政府、企業、NGOも主体的に参加した。冷戦終了から10年、今度こそ「平和の配当」の実現をと多くの人は思った。

だが01年9月11日、米国ニューヨークでの航空機によるテロ攻撃と、その後に続く米国のアフガニスタンへの「復讐」戦争（10月）、さらに同事件と関係のないイラク侵攻（03年3月）という流れが世界を大きく変えた。21世紀の始まりが再び「戦争の世紀」の幕開けになるかのようであった。

そして、NGOにとって2000年代の特徴の一つは、中立を旨とする人道支援活動が難しくなったことだ。

冷戦構造の80年代までは、国連や赤十字を含むNGOの中立性は、東西両陣営から疑似的であれ認められ、守られていた。だが、特に9・11以後のアフガン戦争やイラク戦争前後から、米軍側は侵攻現地の一般市民を拘束、殺傷し、NGO運営の病院を空爆し、報道人を攻撃している。反米勢力も、国連機関、赤十字、NGO、報道人などを拘束し、身代金を要求し、殺傷するケースが増えている。どちら側も「中立はない」と宣言した。

イラクの事例では、西側諸国NGOへの攻撃が相次いだ。JVCも04年、3名の日本人（高遠菜穂子さんなど）の拉致事件を間近に見て、同年4月、日本人スタッフ引き上げと、現地職員を中心にした活動体制に切り替えざるを得なくなった。

第5章――2010年代から現在

JVC発足の80年代と比べると、日本の国際協力NGOは厳しい状況に置かれている。主な要因を列記する。

①国内災害の頻発。東日本大震災のような大災害・原発事故や、気候変動・地球温暖化が原因と推測される大型台風や洪水被害などが続き、「国内が大変なのに」と、海外支援に否定的な意見も拡大する。さらに本年、冒頭に記した、新型コロナウィルス感染症の問題が大きくのしかかる。

②前述①とも関連して貧困の拡大。大企業の蓄財（内部留保）の拡大は、裏返せば雇用の喪失と非正規化がある。個々人の貧困が深刻化するなか、どこまで支援・寄付を求められるか。

③社会的起業の拡大。「世界の経済・社会関係や貿易関係が公正になれば、援助は不要」との考えも広がり、ここ15～20年「フェア・トレード（公正な貿易）」や社会的起業の考え方が主流になってきている。

40年を通し、JVCは一NGOであり、社会的運動体でもあった。現在でもその特徴は、国際協力を担いながら、上記の社会運動の性格、あるいは生き方への主張をもっていることだ。

80年代、難民に象徴される弱い立場の人々への共感と並行して、より根本的に難民を出さない社会を求め、自然環境と相互扶助を基にする地域開発の考えと実践を拡げてきた。

多くの元スタッフ、ボランティアは、帰国後も自ら有機農業を軸とする生活を選び、街に住む側にあっても農業者―消費者の連携を通じ、この動きに連なる。

感染症の収束を祈りつつ、また世界で黙示録的な光景が広がる中、JVCの今後の展開と、関わる各個人の生き方が共に根源的に問われる瞬間が来ている。

私とJVC

タイの事業担当をしていてタイ人のバムルン・カヨターさんやNGOの重鎮バムルン・ブンパンヤーさんなど、農民や村人に出会えたのが人生最大の財産です。彼らのおかげで私も農民になろうと思い、実現しました。 倉川 秀明［パプア・ニューギニア津波被災救援、東チモール独立紛争被災救援（90年代後半）、タイ事業およびスマトラ沖地震津波被災救援活動（00年代）］

モザンビークの子どもたち。この子たちに
明るい未来を残すためにJVCは何ができるだろう

[特 集]それぞれの現場から

抑圧下で小農が続ける実践、連帯と社会変革

モザンビークの小農は、日本のODAも含め海外投資による土地収奪に苦しみ、抗議の声をあげれば政府などからの弾圧を受ける。それでも彼らは、長年の農業実践に誇りをもち、他地域や他国の小農と連帯し、自らの実践と課題を相対化しながら、学びと内省、実践を繰り返し、社会変革を起こしている。今、JVCがなすべきは、単なる技術支援に留まるのではなく、活動地の人たちが世界との関わりのなかで立ち位置を確認し、未来を描くための対話にあるはずだ。

地域開発グループマネージャー兼
南アフリカ事業担当
渡辺 直子

私とJVC

自分の可能性に「気づく(アウェアネス)」機会をつくるのが地域改善の第一歩。アパルトヘイト下の南アフリカで、最初に活動を共にした農村の女性たちのNGO「イシナンバ」で教えられ、まさに気づきでした。 津山 直子[南アフリカ現地代表(94〜09年)]

民主化後の南アフリカ 搾取と抑圧の再生産?

JVCの南アフリカ(以下、南ア)で活動し始めてしばらくした頃、活動するのが怖くなったことがある。

1994年まで約半世紀続いた南アのアパルトヘイト(人種隔離政策)。白人以外の人々が、人権・主権を奪われ、自分で道を切り開く可能性を否定され、自分の一生を他の誰かにコントロールされて生きることを強いられた。その終焉は「被抑圧」の側に置かれた人々が、圧倒的な暴力と抑圧下で、自由を求め、想像を絶する犠牲を払って闘ってきたからこそ、実現したものだ。

だが、そうまでして手に入れた民主化後、南アは、現在に至るまで、「格差社会」「犯罪国家」「HIV感染拡大」…と、いずれにも「世界一の」という枕詞をつけて形容されるほど、劣悪な社会状況が続いている。

アパルトヘイト後の「自由」とは、体制がつくり上げた、限られた人に巨大な富が集中する社会経済構造のなかに、一人ひとりが突然放り込まれることを意味した。その結果、成功を収めた人もいる一方で、大半の人が取り残され、苦難に直面する。

そんな歴史と現状を知るにつけ「この社会構造」下で安定した暮らしを求めることは、搾取と抑圧の再生産に加担しているように思われ、JVCの活動が、自由を求めた人々の思いに報いることができているのか、よくわからなくなったのだ。

抑圧下で未来のビジョンを描くモザンビークの小農

結局、その後、南アでともに活動する人々から、どんな状況であれ、人々をエンパワメントする活動のその先には、搾取と抑圧を再生産する構造を乗り越えるための「社会の側

◎注1…国連小農権利宣言。正式名称は「小農と農村で働く人びとの権利に関する宣言」。小農はその土地の食料や土地、水などの自然資源に権利を有し、その文化的アイデンティティや伝統知識の尊重、種子や生物多様性に関わる権利が保護されるべきと謳っている。

世界の困難な状況にある人々に寄り添いながら、無数のバトンをつないできたJVCの40年。世界が急速に変化する中で、立ち位置を見失いそうになっても、あのときの走者のひとりとしての志を忘れず、走り続けたい。 **名村 隆行［ラオス現地代表／森林担当（02～06年）］**

イスラエル政府が一方的に建設し、イスラエル人とパレスチナ人のみならず、パレスチナ人同士をも分断する壁。アパルトヘイト後の南アフリカを見ていると、この壁が消えたあとの世界をパレスチナの人たちがどう夢見ているのかを考えてしまう

の変革」を、常に見据えることこそが必要なのだと教えられた。目の前の「困難な現在」に取り組みつつも、「未来の世界」の在り方を思い描くということだ。

だが、具体的に誰が何をどうしたらいいのか。まったくの手探り状態だった約8年前、日本・ブラジルがモザンビークで行うODA／大規模農業開発事業「プロサバンナ」に対し、抗議の声をあげるモザンビークの小農に出会った。以来、私は、小農らの抵抗と農業の実践を通じた社会変革を、側で見る僥倖に恵まれてきた。

モザンビークの小農は、海外投資による土地収奪や、その抗議の声に対する政府などからの弾圧など、暴力と抑圧に苦しめられている。だが、そんな状況下でも、「小農は地球の守護者」と言い切る自負と、自らの農業実践に基づいた次世代にわたっての発展をとのビジョンを持ち、以下のような活動を続けている。

①自分たち小農を「何も知らず、貧しい」ゆえに「教えられる／変えられる対象（客体）」として描く資本の論理が支配する社会や援助の在り方に対して声をあげること。

②それに対し、「別の世界」の在り方を、自分たちの農業の実践を通じて示すこと。

③これらの抵抗運動の経験と農業実践を、地域、国、国際レベルにおいて他の小農と連帯することで共有、そこでの学びをさらに自らの活動に還元、発展させること。

18年12月に国連総会で承認された「国連小農権利宣言」（注1）は、こうした小農の経験と知見を、世界大の連帯運動を通して国際規範まで昇華させたものだ。この宣言は、小農という社会集団が抑圧下にある事実を認め、小農が保持する様々な権利を規定し、また小農が果たす役割（貢献）を認めた点で画期的だった。

自己を相対化させるような対話こそを担いたい

モザンビークの小農は、世界的な小農運動ビア・カンペシーナ（注2）の一員として、「宣言」の実現の一翼を担ってきた。こんな風に、世界の小農は、抑圧下にありながら、自分たちとその農業の価値を社会の構造・仕組みに反映させる運動を展開し、社会変革をもたらしている。

とはいえ、その実践は暴力と対峙する命がけの闘いだ。モザンビークの小農がなぜそこまでできるのか。その強さをもたらすのは「自己の相対化と連帯」であると私は思う。

世界と関わるなかで自分を認識する。すると、自分の実践の意義と、自分の置かれた社会的状況という「個別具体的なひとつの事例」を、普遍化された文脈に置き換えることができる。それが連帯につながり、連帯がまた自己の相対化をもたらし、自分に還ってくる。そうして互いに支え合い、強く発展していく。

その実践に学ぶなら、ある意味ヨソ者として現場に関わるJVCの役割は、ともに活動する人たちが「情報やスキルを獲得し、置かれた環境を改善する」ことに留まるのではなく、自己を相対化させるような対話を行うことではないか。その対話は、私たち自身の相対化と内省、実践にもつながるだろう。それこそが「ともに考える」ことだと思う。

「いま、声があげられない」人々も、相対化を通じて「目の前の課題」が普遍化されれば、世界のどこかで同じ課題に対して闘う人たちに連帯することができるし、それが闘う人を支えることにもなる。

暴力や抑圧と闘ってきた／いる人のおかげで今の世界があり、私自身その果実を享受している。だからこそ、変革の仲間を増やし、闘う人との連帯と協働の輪を広げることは、JVCの大切な役割なのだと思う。

日本の企業が土地取得しようとしていたコミュニティ。小農の運動により土地収奪に関する情報を得て、ノーの声をあげて収奪を防ぐことができた

◎注2…ビア・カンペシーナ（La Via Campesina）。スペイン語で「農民の道」を意味する小農組織。1993年に発足、2020年現在、81カ国から約2億の小農が加盟。新自由主義的なグローバル化に対して「食料主権」を唱え、抵抗運動、提言を行ってきた。

JVCが気仙沼事業を終了するにあたって開かれた「感謝のお別れ会」の様子。東日本大震災後の生活再建に向けた住民とJVCとの協働は7年に及んだ

私とJVC

カンボジアで学んだことは、思いやりはボランティアの原点だが、同時に大切なのは、技能をみがいて人々と協働すること、活動は役に立ってるか、自立発展性はあるかを常に考え、改善する、あきらめない、ということ。 **米倉 雪子［カンボジア現地代表（01～08年）］**

［特 集］それぞれの現場から

コミュニティには力がある だから与えるよりも 共に模索を

被災者の「ニーズ」にすぐに応えるのは、その人々を「受け取る」だけの存在にする場合もある。それは、個人の、地域の力を削いでしまわないか。逆に考えると、地域の力こそをまず頼るべきではないのか。どこまでを支援せず、どこから支援するのか。ラオスで、東日本大震災の被災地で、その葛藤から導き出されたのが、「地域の一人ひとりと向き合い、一緒に考えること」だった。

ＪＶＣラオス事務所 現地代表
岩田 健一郎

助けたくても ぐっとこらえる

目の前に一人のラオス人男性が立っている。彼の顔には、ＪＶＣからの支援を期待する色がありありと浮かんでいる。

昨年9月の洪水で家屋を失った男性は、他の村人の物置小屋に家族6人で住みながら、一日も早い家屋の再建を望んでいる。一方、収穫した僅かな米もほとんど食べ尽くし、出稼ぎに行っている娘からの仕送りに頼ったその日暮らしでは、住宅再建の見通しを立てられない。

自力での家屋再建ができない世帯への支援は、一見望ましい活動に思う。再建に必要な木材やトタン、釘などの資材提供は、資金上無理なことでもない。

それを理解しながらも、私は判断に迷った。私の頭から離れなかったのは、この世帯がＪＶＣから手厚い支援を受ければ他の村人から妬みを買うのでは、という懸念だった。私は力強く支援を約束したいという思いをぐっとこらえて、男性に「考えさせてください」とだけ言った。

「ニーズに応える」のがいい活動なのか？

「人々が外部の力に依存してしまわないよう、モノ、カネなどの投入には細心の注意を払う」

これは私が、ラオスでも、長らく身を置いた気仙沼でも、事あるごとに思い浮かべ、繰り返し肝に銘じてきたＪＶＣの行動基準の一つだ。

災害の現場では多くの物質的支援の需要が生まれ、支援者もまた、目に見えやすい物質的支援に傾きがちになる。他方、外部からの支援に依存して成り立った暮らしは、それが途切れた時、立ち行かなくなる怖れがある。また、そうした支援は地域

ラオスの村で協力して井戸を掘る村人とJVCスタッフ。「活動地の人々が、持てる範囲で最大限の知恵、時間、労働力、賃金・資材などを出す形で活動を進める」というのもJVCの行動基準の一つである

や支援を受ける当人に予期せぬ負の影響をもたらすことがある。

東日本大震災以降、気仙沼では多くのモノの支援が飛び交ったが、JVCはモノの支援を抑制した。私たちが重視したのは、住民との対話を積み重ねながら、地域に入り、埋もれがちな支援ニーズを丁寧に拾い上げていくことであった。

その過程で、私たちの活動が住民の過度な支援の要望を引き起こすこともあった。例えば、被災した家財の撤去を支援していると草刈りを頼まれるようになった。家事手伝いや慰安旅行の企画の依頼を受けたことも一度や二度ではない。どんなニーズにいかに応えるか、それを簡単に判断するマニュアルはなく、常に悩みが伴った。

NGOは支援者として現地に入る。この時点で住民との間に「支援し、支援される」構図が生まれる。NGOはできる限り多く支援しようとする。住民の要望がすなわち「ニーズ」になり、そのニーズに応えることが良き活動であると考えがちになる。

しかしながら、その姿勢で住民と向き合うと、本当に必要な活動や私たちが果たすべき役割を読み違えることがある。結果として支援活動が、地域や人々が本来持っている力を削いでいることが往々にしてある。「ニーズに応える」ことに囚われては、その力はよく見えてこない。

一緒に考え、悩み、活動する

気仙沼の現場において、支援がかえって住民の力を損なうと判断された時、はっきりと要望を断ることに努めた。と同時に、JVCは一方的に支援する存在ではなく、住民とともに考え、悩み、活動する伴走者であるという姿勢を示し続けた。そうした姿勢は、徐々に住民に理解され、住民とJVCとの長きにわたる協働につながっていったと思われる。

気仙沼の人々と深く関わるうちに明確に認識されたのは、地域が元来持つコミュニティの力である。それが、震災による住民の離散で大きなダメージを受けたからこそ、JVCの役割は、気仙沼の人々が主体となり、コミュニティを築き直すための出会いや話し合いの場をつくり続けることであると考えた。

仮設住宅での活動でも、集団移転のサポートでも、災害公営住宅の支援でも、JVCはそのことに一貫して取り組み続けた。

地域の人々を主体として、対等なパートナーシップを築きながら協働する。これもまた、JVCは行動基準として掲げている。

ラオスの現場で、洪水によって家屋を失った世帯を訪問した時、私たちを案内してくれた村人が村長と顔を合わせるなり直談判を始めた――「皆で協力して家屋再建を助けよう」

その村人も米倉や水田に大きな被害を受けて日々食べることに苦労しているが、JVCとともに家屋を失った世帯を訪問したことで、その支援を思い立ったようだった。村長はやや戸惑いながら「他の村人と話してみよう」と言った。そのやり取りをみて私は、JVCの役割は家屋再建に必要な資材を提供すること以上に、村人とともに助け合いの方法を考えることであると思った。

私たちが活動地の人々にとって真のパートナーになるためには、地域と、その地に暮らす一人ひとりと向き合うことが必要不可欠だ。

「足りないものを補うのではなく、つくる方法を一緒に考える」。

JVCは、時と場所を選ばず、このことを重視しこだわり続けてきた。これからもそれは変わらない。

気仙沼で被災した世帯を訪問して話に耳を傾ける筆者(写真右)。住民との対話は地域で活動する上での基本かつ最も重要なことの一つである

私とJVC

名前負けと言われようと、JVCはやっぱりボランティアセンターでした。イベント企画も事務作業も事業運営も「大変だー」と言えば必ず助けて下さるOB／OG、ボランティア、仲間がいました。遠慮せずに頼るべし、道は開ける。 **寺西 澄子**［会員担当、コリア事業担当（00～10年代）］

私とJVC

タイボランティアチームと言えば手作り石鹸で有名です。作り始めて十数年経ちましたが新たに山岳少数民族のシルバーネックレスの販売も始めました。某有名フリマサイトに石鹸と一緒に出品しています。 石田 明暢［タイボランティアチーム］

JVCとともに歩む理由

―現場を訪ね、協働を重ねるパートナーから―

40年の間、JVCの活動は数え切れないほどの方々とともに、同じビジョンを目指し協働することで前へと進み続けてきた。ともに歩む中で育んだ活動への思いについて、現場へ足を運び、人々の存在を肌で感じてくださったお二方からご紹介いただく。

カンボジアでの豊かな出会いから考える「枠」を超えた共生

廣瀬 文女（写真右）
株式会社 童話館
編集企画室

株式会社 童話館
1981年、絵本やこどもの本を専門に扱う本屋として、長崎にて創業。2001年に「子どもの平和と生存のための童話館基金」を設立し、JVCのカンボジア事業をはじめとした国際協力活動を支援。絵本の定期便「童話館ぶっくくらぶ」が、世界の子どもたちへの温かな支えとなっている。

初めてのカンボジアで

2019年4月21日。私は人生で初めて、カンボジアの地に降り立ちました。首都プノンペンから、事業地のある農村のコンポンクダイ、農作物を出荷している都市シェムリアップ、そしてまた農村へ…と、およそ一週間、JVCスタッフの皆さんに導かれながら、総移動距離8500キロを走りまわり、想像以上の豊かな体験をすることができました。

印象深い出会いは数えきれません。立派な家庭菜園をつくりあげ、これから野菜の販売を始めようとしているボッパーさん。家庭菜園の野菜や、研修で習った加工品を使った料理をふるまってくださったコッサンさん。新しいため池のそばに住み、家庭菜園を始めることに希望を感じていらっしゃったソーンさん…。そしてなにより、地元のJVCスタッフ、ポクさんのお宅に泊めていただいたことは格別の思い出です。2才と10才の子どもたちも一緒に、食事を囲んだり、川の字になって眠ったり、水浴びをしたりして、家族の暮らしを肌で感じることができました。

「小さなできごと」から思いを馳せる

それにしても、初めて訪れたカンボジアで、なにごとにも親近感をもって出会うことができたのは、JVCスタッフの皆さんが、これまでたびたび童話館を訪ねて、たくさんのお話をしてくださっていたからだと思います。それも、「結果」だけでなく、それができるまでに積み重ねていった「小さな工夫」や、村の人が抱えられていた「不安」、取り組みのなかで見つけた「喜び」など、ともすると脇に追いやられてしまいそうな「小さなできごと」ばかり。どんなこともともに喜び、悲しみ、悩みに寄り添っているからこそでてくるエピソードの数々は、遠くで暮らす人々をぐっと身近に感じさせてくれました。

当たり前な関係性を超えて

農村でのある研修会のなかで、チョムノーさんという女性から「私たちはいつもしてもらうばかりで、お返しができていないんじゃないかしら」という質問がありました。そのとき、現地駐在員の大村さんが、「私たちはあなたたちからたくさんのことを学んでいます。家族の仲のよさ、親戚や近隣の人との助け合い、譲り合う気持ち。手先の器用さを活かして身近なもので工夫しながら暮らす姿。皆さんのありのままが私たちの暮らしを見直すきっかけになっています」と。

国境や人種、そして「支援をする／される」という枠を超えて、人と人がともに生きるとはどういうことか…。カンボジアの皆さん、そしてJVCの皆さんはいつも、私たちの精神性を深める手助けをしてくれています。

私とJVC

私がJVCの大好きなところは、「ぱっと見、代表が誰だか分からない」ところ。あらゆる国・幅広い年齢層、そしてあらゆる職能を持つ人々が集まる、多様でかつ対等な場。それが私にとってのJVC。**白川 麻子**［アフガニスタンボランティアチーム］

対話と試行を重ねながら共に発信するパートナーとして

堀 潤
ジャーナリスト・キャスター
市民メディア
「8bitNews」代表

1977年生まれ。NHK報道番組キャスターなど担当後にフリーへ転身し、現在テレビやラジオなどに出演しながらSNSや執筆でも精力的に発信を続ける。原発事故後の福島をはじめ、シリア、パレスチナ、朝鮮半島、香港、沖縄などをめぐって進む人々の分断を描いた映画・書籍『わたしは分断を許さない』には、JVC事業地の声も映されている。

今こそ試される、わたしたちの民主主義

今、世界が混迷を極めています。紛争やテロ、格差や貧困、環境破壊、イデオロギーの衝突、これらに加え、未知のウィルスとの格闘が続いています。人間の尊厳が脅かされ、社会の分断を感じさせる出来事があちらこちらで勃発しています。先行きの見通せない混沌が不安や不満を増長させていきます。決断力と指導力のある強いリーダーを求める気持ちが、私の中にも日に日に大きくなっていくのを感じています。

ですから、これほど自分自身に対して恐れを抱いたことはありません。私は、これまで対話を重んじ、慎重に事実を集め、精査し、検証し、広く議論し、そして各々が決断するという民主的なプロセスの必要性を日々の活動を通じて訴えてきました。しかし、目の前の危機を乗り越えたいという一心で、迅速で力強い実行力を政治に求める自分がいることに気がついたからです。

不安や恐怖がそうさせるのでしょうか。決定に関わる地道なプロセスが逆にもどかしく感じられてしまったのです。自分自身の心の変容に恐れを抱いています。今こそ、民主主義の底力が試されているのだと、自らの心を鼓舞しながら日々の取材や発信活動を続けています。

勇気を振り絞って声をあげた一人一人に寄り添う

民主主義の対義語は何でしょうか。辞書などを引くと、「独裁」や「専制」、「全体」主義などの文言が並びます。国王や政治指導者など一部の権力者が、私の、そして人々の生きる方向性を決めてしまうあり方です。しかし、私は民主主義の対義語は「沈黙」だと思っています。例え独裁者がいなかったとしても、人々が沈黙して、何も語らなくなってしまえば誰かの大きな声に従って生きなくてはならないからです。

しかし、一個人が声をあげるというのは大変勇気のいることです。意見することによって対立が生まれたり、排除されたり、奇異な目で見られたり、不利益を被ったり。生命と財産を奪われる国や地域もあります。私も、怖くなって思わず言葉を飲み込んでしまいそうになることがあります。ですから、周囲に勇気を振り絞って声をあげている人を見つけると、駆け寄って「共に発信しましょう」と連帯の意思を伝えることにしています。黙ってしまったら何も始まりません。自分で決めるという大切な尊厳を自分自身で潰してしまうことになりかねないからです。

私はJVCの皆さんの活動に共感しています。職員の皆さんは、まさに支援を必要とする世界各地の人々の元に駆けつけ、共に悩み、議論し、前進しようと日々最前線で草の根的な支援活動を続けているからです。

パレスチナ、カンボジア、朝鮮民主主義人民共和国、スーダンなど、この3年で各活動地域での取り組みに同行しました。一人一人との対話を重んじ、丁寧な試行錯誤を重ね、自分自身の焦りやじれったさに自問自答しながら、現場のみなさんがバトンをつないでいく様子に心が揺さぶられました。活動の必要性を市民社会に訴え、寄付を募り、渡航が制限されている地域でも独自の活動を続けてきたことにも敬意を感じます。そうしたJVCの皆さん一人一人の様子が、私を鼓舞してくれます。ありがとうございます。

これまでの40年。そして、これからの一日、一日。分断されそうな今だからこそ、共に発信を。そして連帯を。

私とJVC

私にとってJVCは実家のような存在。今までいろいろなNGOに関わってきましたが、JVCはいつもそこにあって、あるだけで安心するものです。人は変わっても、そこに流れる空気は変わりません。参加すること、できることをやること、そして発言することを叩き込まれました。 前川 昌代［80年代のJVC設立に参加、広報担当（85〜93）、JVC神奈川代表（93〜95）］

特別座談会　星野昌子×現役スタッフ

世代を超えて受け継ぐ、JVCのDNAとは

1980年、タイのバンコクで産声を上げたJVCは、当初、2、3年の緊急支援だけを想定していたが、目まぐるしく変わる世界情勢と対峙し、地元住民の意向に寄り添うことで40年経った今も世界11か国・地域で活動を続けている。当初からの目標である「JVCが不要になる世界をつくる」にはまだ遠いが、このたび、40年間でどういう人たちがどういう思いでJVCに関わってきたのかを創設者と現役スタッフとが話し合った。

長男の嫁をやめて気づいた主権の大切さ

並木　JVCの今や今後を考える中で、「JVCのDNAって何だろう」を私自身、何度も模索しています。JVCを立ち上げた世代の皆さんが、何を大切にして、何が今も変わらなくて、何が時代背景とともに変わってきたのか。私は、星野さんの原稿やJVCの過去の本を読み、「この人たちはJVCを場として、自分にとって大事なものを表現し続けてきたんだな」というのを感じるんです。改めて、今回OGと現役が話す中で、私たちが抱くジレンマや希望、変わったもの・変わらないものが伝わったらいいなと考えています。

まず最初に、最近の星野さんが何をしているのか伺いたいです。

星野　今年1月から横浜国際交流協会の通訳ボランティアを始めました。英語、フランス語、タイ語、ラオス語で登録してますが、先日、4ヵ月の赤ちゃんの検診のため、ベトナム系のお母さんの通訳をしました。

渡辺　通訳ボランティアはなぜ始めたんですか？

星野　ドイツ語を勉強していますが、ドイツ人の友人は英語ができす

星野 昌子

1980年、JVCの設立で中心的な役割を担い、発足後には事務局長を務める。その後はJVC特別顧問のほか、神奈川県立かながわ女性センター館長、日本NPOセンター代表理事、G8サミットNGOフォーラム代表などを歴任。日本社会に国際ボランティアの潮流を生み出したことが評価され、2012年に旭日小綬章を受章。

岩田 健一郎

ラオス事務所現地代表。2011年5月、JVCが募集した気仙沼でのボランティア活動に参加、翌月には震災支援担当に着任。2014年11月より気仙沼事務所現地代表を務める。気仙沼事業終了後、2018年4月より現職。

ぎて、習ったドイツ語を話すチャンスがなかった。で、身近にいる方とやりとりできないかと探したら、横浜市鶴見区の潮田地区にブラジル人がいっぱいいると知ったの。彼らは人生を楽しむために働いています。彼らに「日本人は働くために生きてるの？」みたいなこと言われちゃって。

私の父は昔、コーヒー輸入を手掛けていたの。エルサルバドルのコーヒー紹介のため、日本のコーヒー業界の人たちをチャーター機で現地まで招待したときに、高血圧の父に代わり私が行くことになった。それで中南米に行ったら、人生を楽しむ人たちがいた。日本人はなんで働くために生きるんだと聞かれたわ。今回、潮田地区で「ああ、あの世界だ」って懐かしくなったんです。そこからボランティア登録しました。

父のことで話せば、ハワイに6〜7年住んでいたせいか、私は「女の子なんだから」とは育てられなかった。勉強したければ大学に、したくなければどこへでもという自由な環境で育った。でも、その私は一人息子の嫁になって、大学出てから10年を嫁いだのね。

並木　よくそこに行ったなと思いました。自由な暮らしをしていたにも関わらず、長男の嫁に入るっていう。

星野　私の父は、日曜日に朝ごはんの支度をしてフレンチトーストを焼く人で、それが家族って思ってたの。だから、彼の両親との同居もうまくいくに決まっていると思ってた。

でも、日本における家庭って逆三角形で、トップに一人息子がいて、両親が一所懸命に「偉くなれ、お前のためだ」って押し上げて。底辺に私がいる。3人が歌舞伎に行っている間、私が料理して。お風呂に最初に入るのはお義父さん、次はお義母さんと息子。外国語への情熱から、日仏学院でフランス語を学んでいたので、フランス人の先生から家に電話がかかってくると姑がガチャっと電話を切っちゃう。お嫁さんにフランス語は必要ありませんって。私はなんでこうなのと思った。そのうち、私が悪いんじゃない、この環境を捨てなきゃってある時思ったの。子どもを2人ももうけているにも関わらず、私は家を飛び出してしまった。これからは世界で生きよう、日本なんか勝手にしやがれと。（笑）

渡辺　私、JVC入職時のオリエンテーションで唯一覚えていることは、星野さんが「あなたを幸せにすると言う人じゃなくて、あなたが幸せになるのを邪魔しない人と結婚し

渡辺 直子

2005年にJVC入職し南アフリカ事業を担当。2010年より現地代表を経て、2012年より同事業担当として東京事務所勤務。プロサバンナ事業に関し、日本政府に対するアドボカシー活動も行う。2017年度より地域開発グループマネージャー。

並木 麻衣

2013年にパレスチナ事業東京担当としてJVCに入職。2016年にエルサレム事務所現地駐在員となり、2017年に再び東京事務所に帰任。2019年に広報／ファンドレイジンググループマネージャーとして異動。

私とJVC

電話も紙メディアも元気だった1992年12月、朝日新聞の「天声人語」にコンサートが取り上げられた。ベテラン富安さんの朝の一声は「全員で電話番よ」。総力をあげて応対したあの日のことは忘れない。もちろん当日は満員。　**佐久間 典子［コンサート担当（92、99〜01年）］**

なさい」って言われたことです。（爆笑）

星野　嫁ぎ先を飛び出たあと、青年海外協力隊でラオスに行ったら、今度は、人間としての幸せを実感した。

ラオスの家庭では晩御飯の支度が近くなると、水を汲みにいく男の子、火を起こして料理をするお姉さん、お母さんといて、みんなで大きなお盆を囲んでカオニャオを食べる。誰も何かを命令しない。みんな平等なのね。知的障がいを持っている10歳くらいのスイタラーという男の子がいるの。床下に水牛や鶏や豚がいるけど、動物たちはスイタラーを一番尊敬している。何かあったらスイタラーが行けば問題解決という感じ。それをお父さんや兄弟が判っていて、とても大事にしていた。

かつて私がいた家族が円錐だとしたら、これはみなが同じところに乗っている円盤。これが家庭なんだと実感しましたね。

JVCが始まって、世界で起きている問題にも共通のことが言えると思いました。当時は日本も経済大国で、恵んであげればトリクルダウンを信じていたけど、この円錐構造では、絶対に底辺は上がらないんだと。

並木　その結婚の10年間があったから、星野さんは主権を大事にしようとの思いに行きついたのですね。

星野　そう。本当に苦しかったから。子どもたちは別れたあと、長女は友だちみたいですが、息子は私に会いたくないって。悲しくないわけではないけれど、当然そこを踏まえ決心しているので。その結果、いいところもあったし、失ったものもたくさんある。そういうものが、JVCでやっていく起爆力になりました。

変えたい人たち、闘わない人たち。どちらにも価値がある。

星野　JVCを設立した40年前の日本は経済大国で、敗戦から力をつけた日本は素晴らしいみたいな精神的評価も受けていて、「自分の国は大丈夫」と思う人たちが多かった。今は、震災、自然災害、いろいろな問題があって、日本は大丈夫という感じが全然しない。

今JVCで活動する人と、当時の人との大きな違いはそこだと思います。当時は、良きにしろ悪しきにしろ、日本は大丈夫だから外国を助けてあげようとの思いがあった。

渡辺　私は大学卒業の年にはバブルが弾けていたので、「日本が外国を助ける」みたいな考えはなかったけど、それが良かった。「問題が生じる状況を変えていく」という目線でJVCの活動に入っていけたから。

でも、「社会や世界のために何かをしたい、変えたい」との思いで、いざ南アフリカに行けば、「世界一」と言われるあまりに大きな格差を目の当たりにし、「あれ、私はどういう世界を目指していたっけ」と自問自答に迫られた。

そこから必死に、目に前にあることをこなすうちに、南アの人がぽつぽつと発する言葉とかで「そうか」と思ったのは、どういう社会にしたらいいとかは、私が考えることじゃない、と。この人たちの世界観や思いに沿って、一緒に考えてつくり出していくこと。それが南アだけじゃなくて、自分が生きる社会にもつながっている。それを学べたのは本当に感謝しています。

並木　現地の人から吸い取った「こういう社会にしたい」という思いは、一体どんなものだったんですか。

渡辺　たとえば2008年頃、隣国ジンバブエでは、何兆％とかのハイパーインフレで貨幣が価値を持たなくなった。でも、南アの活動に関わっていたジンバブエ人のトレーナーが「家族は普通に暮らしている」と言うので、一度連れていってもらった。そしたら、農村部でも都市部でも、ジンバブエには南アと違ってローカルマーケットがあり、地元の人が作ったものを地元の人が決めた価格で販売していたんです。

それまで自分が思っていた活動の成果は現地の人たちが、「今ある社会」の中で道筋を見つけて暮らしを成り立たせることだったけど、大きな経済から切り離されて、自分の手の中に暮らしのコントロールを持っているってむしろ強いと思った。

南アで、JVCの農業研修を通して作物を作って家族を養えるようになった女性が「私、ようやく人間に

なれた気がする」と言ったんです。この誇りに基づく実践をベースに暮らしが成立するよう、世の中の仕組みをどう変えるかじゃないかなと。

星野　渡辺さんが仰っている「ここを変えたい」という話。私の感じでは、ラオスの人たちはあまり闘わないのね。でも、闘わないというのも人生の知恵だなって。やたらと闘って何かを獲得するとかの望みを持たないことによって、むしろ心の平和を保つことができる。あれやっぱり逆に学ぶべきだって思うんです。岩田さんは、ラオスで生活してどんな感じですかね？

岩田　闘おうとしないのはありますよね。その中でも生き抜く術は持っている。それを我々が、一緒に活動する中で学んでいる。ラオスの人たちが、積極的に闘おうとはしないが大事にしようと思っているものを守りつつ、ともに少しでも良きものにしていければいいと思っています。**渡辺**　私は、一昨年、ラオスに初めて行って、暮らしの在り方も自然も、アフリカとは桁違いに豊かと思った。あそこは支援というより、その価値を守って伝えていくのがとても大事な場所だなと。それをどう押しつけがましくなく共有できるかなとは思いました。

人生を乗り切るのは シンプルな生活

星野　私もラオス時代にそう思った。やっぱり仏教が相当影響している。私は青年海外協力隊が終わっても日本へ帰らず、ラオスに残って、在ラオス日本大使の秘書をやっていた。

私にはラオス人の、正式ではないけど、養女がいます。彼女が12歳の時、ラオスの我が家にお手伝いさんに来てくれたけれど、勉強の意欲があったので、私は彼女を中学校に通わせ養女にしたんです。

そのとき、敗戦後もラオスに残留した元日本兵が大使館の物品購入の仕事をしていた。でも、会計上計算が合わない。ある日、それがバレて、彼はその仕事から外されたの。

私は自宅で、再婚した夫と養女の前で「あいつが怪しいと思っていたのよ」と話したら、娘がめそめそ泣きだした。どうしたのと尋ねたら、「悪さをした人が、それがバレて知られた場合は、仏教ではそれを責めてはいけない。お母さんがやったことは、盗みよりもっと悪い罪なんだ」と。泣いたのは、私に罰が当たるのではと悲しんでいたからなんです。

渡辺　日本では一回失敗したらもう許されない。それを許容できる寛容さは素敵だなと思う。

岩田　私もラオスで感じるのはそこ。今、ラオス人スタッフと駐在員との間で、隔週で、互いの社会のいいところを語り合っている。私が伝えたのは、ラオスは寛容であること。そこが日本とは特に違うと。

並木　向こうは日本のいいところはなんて言うんですか？

岩田　言われるのは「とにかくハードに働く」。

皆　それ、いいとこなのかな？

星野　日本人のDNAがもっているのよね。のんびりできないというか。

渡辺　星野さんが話した、みんなで作って、食べるということ。それは大事だなと思う。アフリカで、生活の苦しいシングルマザーでも、夕方には子どもとお母さんが揃って、ちょっとお話しして寝るみたいな、暮らしがとてもシンプル。

あえて学ぼうとか成長しようとかはないけれど、日々の繰り返しの中からの深い言葉が出てくる。でも日本にいると、経験が大事だとか、学ぶことが凄くいいことだとされて休日には美術館に行かないといけないみたいな気持ちに急かされる。（笑）

星野　縛られているのね。

渡辺　縛られることが日本では多い。人としてのシンプルさ、生きる軸があれば、大概のことは乗り越えられる。アフリカの女性たちを見てすごいなと思う。

問い続けられる場で ありたいJVC

岩田　ちょっと私の話をすると、大学生の時にイラク戦争が起きた。大義なき戦争に日本が加担することは明らかにおかしいと思いながら、それに対して何もできない自分に鬱屈した思いを抱えるだけだった。大学時代に日本を回って農業やったり、

私とJVC

2000年から2007年までJVC九州ネットワークの事務局を手伝いしました。年に数回カンボジアを訪問し、JVCのCLEANプロジェクトを支援し、スタッフの方を福岡にお呼びしました。カンボジアをはじめJVCのスタッフの皆さんとの出会いはとても大切な思い出となっています。 重田 康博 〔元JVC九州ネットワーク代表／現宇都宮大学教員〕

JVCにいた頃、プロジェクトは〝生き物〟だと思ったことがあります。関わる人でいかようにも姿を変え、社会に挑んでいるように見えたからです。これからの時代、多難の中で輝くJVCの姿に期待しています。祝40周年。 谷山 由子［カンボジア＆アフガニスタン＆南相馬事業担当］

大学を出てからバックパッカーで世界を回ったりしたけど、結局何も見えてこない。そして、2010年に帰国してJVCの門を叩いたんです。私は、どういう社会を目指し、どういう生き方をしていくのかを問い続ける場として、JVCに参画した。

自分の生き方がわからない、見えてこないからこそ、同じ一人の人間として、一緒に考え問い続ける。これまでと同様、JVCをそういう場にしていきたい。

星野　それをしようと思えばできるのがJVC。そこが40年変わっていないのがすごいこと。誰も、JVCとはこういう団体だと定義しないし、入るならこうしろとも言わない。

渡辺　JVCに来るきっかけは、南アフリカ担当の公募が出ていた際、JVC関連のビデオを見て、星野さんの「組織は迷いがなくなったらおしまいだ」との言葉が印象深かったから。「考え続けろ」とのメッセージが伝わってきて、すぐに応募したんです。

星野　JVCがバンコクで創立したとき、主力の主婦が「自分たちが歳取ったとき、この団体って存続するかしら」という話になった。すると誰かが「JVCのような組織がいらなくなるのが目的」って。その意識は初めから持っていた。

組織は立ち上げると、その存続のために力を注ぎ、トップも「自分がいなければだめだ」となるけど、JVCはそうではない。

並木　だから設立40周年もお祝いしていいのかどうか。（笑）

ただ、集まって議論する場があることは貴重。世の中から様々な問題がなくなっても、岩田さんが言ったような、問い続けていける場であってほしい。

オジサンたちを斬る

星野　JVCがバンコクで産声を上げたとたん、こういう市民団体ができたといろいろなところからお金がワッと来ちゃって。私は月に一回、東京都杉並区の汚い事務所とバンコクを往復していて、そのうち、国連のお金も杉並のなんとか銀行に入金されると、その銀行から「3600万円がスイスから入金されたけど間違いではないでしょうか?」と電話が来るわけ（笑）。そして、そういうお金を東京だけで貯めておくわけにいかず、バンコクで口座を開こうと三井銀行ともう一つを回ったら、在タイ日本大使の公使から銀行に「市民団体が口座を開くということでそちらに行くと思うけど、断れ」と連絡が行っていた。何千万円の金が入ろうというのに口座を開かせてくれない。最初の7、8年ぐらいは、NGOがODAと国連を通した協力の世界に割り込むのがけしからんと、何についても潰そうとの風向きだった。

2013年、私が旭日小綬章をもらったときにJANICでパーティやったけど、私はゲストの外務省を名指しで「（創設時からずっと）敵はあなた方だった」と言ったら「そうですか…」と言ったんだ（笑）。でも言いやすかった。世界の状況を伝えて、日本に変えさせるっていうのはやりがいがあるし、当時のタイ・カンボジアの国境だって30何団体来てたんですから、こっちが強いですよね。

その点では今、（ODAのプロサバナ事業（注1）と対峙する）渡辺さんは全然違う苦労をしていらっしゃると思うわけ。

渡辺　問題の張本人が日本政府というのは同じ。ただそれが、官民連携になり複雑になった。

問題は、官も民も自分たちを「監視する市民社会」を排除したいこと。直接的暴力で脅すこともあれば、情報を隠蔽したり、取り込んでいくこともある。

最近、例えばODA政策協議会（注2）でも、背中から刺される。現場の人権侵害について議論している際、外務省が答えないから事実ベースの確認をくり返すのに、NGOの人が「言い過ぎでは」となることがある。市民の側が思考停止に陥って、取り込まれているのが一番怖い。

岩田　以前、本で目にしたのですが、星野さんは、笑いながら相手を斬るとおっしゃっていました。

星野　そうそう、だいたいコノヤ

◎注1…プロサバンナ事業。日本のODA事業のひとつ。アフリカのモザンビーク北部地域の1100万ヘクタール（日本の耕作面積の2倍）を対象とする一大農業開発事業として始められたが、その一方で、直接的、間接的にも地元の小農が、アグリビジネス企業による土地収奪や暴力など人権侵害の問題に直面している。

ローと思っていても、交渉事でひどい顔をして出ていくと、あいつにはもう会わないとなるので、やはり、そちらのお考えもよくわかりますと二コリと笑ってバッサリ斬る。（笑）

渡辺　全部そのせいにはしたくないが、壁を感じるのが男性社会。日本はまだまだ男性が権力を持っている。彼らから見れば若い私が事実を突きつけてグサグサ刺すと、うっとうしがられる。同じことを男性が言うと態度が違う。そこは変えたい。

星野　08年、北海道の洞爺湖で開催されたG8サミットには、NGOも200くらい集まった。そのとき福田康夫首相が「男女格差指数が世界100何位とかいうけど、なぜ国内で女性が活躍できないのか？」と言うので、私は「それは日本社会が悪いから。日本にいたら自分の力を発揮できないから女性は外国に行く」と言ったのね。そうしたら、首相に「日本社会はそんなダメなところだと思っているのか！」とみんなの前で怒られた。「思ってますよ」と返したけど。（笑）

ああいった、えらそうな顔するオジサンたちは斬らないと駄目ね。日本の男は自分より若い女に何か言われるのが絶対に許せない。でもこっちはね、おじさんが首相であろうが斬るよ。（笑）

「違う」から「変わっている」から面白い

渡辺　NGOですら、女性に対して上から目線の男性は普通にいる。ODA政策協議会でも、NGO側の報告者の女性は私一人のことが多い。政府側でも、後に座る課長補佐クラスには女性がいるが、決定権を持っているのは男性ばかり。

星野　私は、JVCでは、男性も女性も平等にと言ったことがない。言う必要がない。

渡辺　JVCは人数も男女半々ですね。NGOの中では珍しい。

星野　女のくせにって誰も思わないしね。

渡辺　そんなこと言ったら袋叩きにされますよ。（爆笑）

星野　この話まとまるの？

並木　大丈夫です（笑）。最後に何かどうしても言っておきたいことがあったら言ってください

岩田　活動を支えているのは、結局、人への興味です。日本人だからとかラオス人だからとかじゃなく、その土地で根を張って暮らす人たちと会って話をして、ああだこうだやるのが好きなのです。そこがベースです。

星野　日本って、ステレオタイプで、こうあるべきだとか、こういう時はこう言うと決まっている。ほかと「変わっている」のを嫌うのが日本社会で、ちょっとでも違えばもう駄目。そういうの面白くないじゃないですか。外国人となれば、根本的にいろんなことが違うから、いろんなことに興味を惹かれる。人間として面白いと思うのは「変わっている」こと。

渡辺　私は、人が好きだからで始まったというより、活動を通じて世界観がガラリと変わるとか、「そんなこと、やる⁉」みたいな怒りを含めた驚愕とかが面白い。そこには発見がある。

並木　JVCが今後目指す姿を考えた合宿で、今日お話にあったようなトピックが出てきた。公正、共存、主権、それから新しい価値を示すこと。人と向き合い、それで自分が変わったり、発見があったりというのは、そこにつながると思います。

星野　長生きはいいけど、心身ともに元気でないと面白くない。結局、歳を取って判るのは、その歳になってみないと判らないということ。つくづく思いますね。親のことなんか、思いやれなかったなとかね。それはそれで良いと思うんですよ。その年代の感覚でご自分でも重ねていく。今は、それなりに老後は楽しい。

並木　私は、歳とってもドイツ語を勉強している星野さんを見ると、歳とるのも悪くない、大丈夫と思う。

星野　好きなものがあったらやめちゃダメ。続けるべき。

並木　本日はありがとうございました。

◎注2…ODA政策協議会。NGO外務省定期協議会のうちODA政策について協議する、年3回開催される会議。

私とJVC

JVCはとても硬派だから好きです。カネの魔力にも権力の誘惑にも決して揺らぐことがなく、現場の人のことを考え、現場の人と共に活動する。だから信頼できるんです。　田中 優［元理事］

私とJVC

JVCに関わって早22年。こんなに長く関わってきたのは、ボランティアであっても「やりたいことやってよい、ただし責任は自分たちで」というチャレンジの場を常に与えてくれたから。このJVCの〝V〟の精神、大好きです。 中川 透［アフリカ／ラオス／コリアボランティアチームなど］

人は変わることができる。

過去、JVCには多くの人が携わってきた。
それは日本人だけではなく、
自分たちの暮らしを少しでもより良くしようと、
現地での取り組みに参加してきた「そこに暮らす人たち」だ。
ここでは、JVCの活動との関わりが
人生に大きな影響を与えたというエピソードを2つ紹介する。

サビルラ・メムラワルさん
JVCアフガニスタン事業 現地パートナーNGO代表

アフガニスタン事業担当　加藤 真希

「力」が支配する世界、銃を手に取るしかなかった

アフガニスタン東部出身のサビルラ。190センチ近いがっしりとした体格は迫力たっぷりだが、その落ち着いた振る舞いや話し方、ジョーク好きの柔和な笑顔に触れていると、彼がこれまで体験してきた苛烈な人生を想像することは難しい。

小さい頃、自国に侵攻してきたソ連との戦争に兄が参加。自分が通っていた学校もその戦争で燃やされている。地元の村の指導者のひとりだった父は、村での戦闘行為を避けるよう地方行政に交渉しに行った数日後、ソ連と戦っているはずの自国の武装勢力から命を狙われるはめになった。その結果、家族全員で隣国のパキスタンへ逃れることになる。「力を持つ人間が勝つ社会」で生きてきた彼自身が、若くして銃を手にとることは自然な流れだった。パキスタンでは武装警備員として働き、他の家族との土地をめぐる争いが銃撃戦になったときにはそれに参加している。

2001年の9・11後に帰国。国のためだ、と周りに説得されて米軍に反発するタリバンを陰ながら支援することに。それから数年後、友人の紹介で運転手としてJVCで働くことになった。ある時、当時の駐在代表だった谷山からこう言われたそうだ。「君にもアフガニスタンの平和のためにできることがあるんだ」

力ではなく対話で平和に近づく方法を

政治家でもない自分に？最初は気にもかけなかった。しかし数年後、同僚の母親が駐留米軍の発砲によって重症を負った際に、谷山が米軍に対して抗議する、という場面に同席し、超大国の米国の軍隊に対して交渉ができるのか、と驚いた。

治安の悪化で日本人が帰国した08年、JVCが運営している診療所近くに米軍のロケット砲が打ち込まれて村人が負傷、診療所も被害を受ける事態が続いた。怒りと怖れに震えながら自ら砲弾の破片を証拠として集め、砲弾発射の写真を撮影し、米

軍にそれが軍事演習だったことを認めさせ、今後は行わないと言わせた。「力」ではなく「対話」で状況を変えることは、できるのだ――。

彼は今、自分の家族から始めた平和教育――争いを避け、暴力に傾倒しないよう、話し合い、アクションに移す活動――を地域に広げている。銃を置き、対話の力をつけること。一番身近なところからのこの積み重ねが、いつかアフガニスタン全体の平和につながると信じて。

チョさん

平壌外国語大学教員／『南北コリアと日本のともだち展』卒業生

コリア事業担当　宮西 有紀

細くても長く続けることが時代を変える可能性を生み出す

『南北コリアと日本のともだち展』（以下、『ともだち展』）は、実際の往来が容易ではない東北アジア地域（日本、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、中華人民共和国）で、「いつかは出会う未来のともだち」である子どもたちの心と心を絵やメッセージでつなごうと、01年からJVCを含む複数のNGO団体が共同で開催してきました。

絵とメッセージの交換を通しての「出会い」が目的で、一緒に交流しながら作品を制作する海外でのワークショップに参加し往来した子どもたちの延べ人数は300名、行事参加者は千名を超えます。そして20周年を迎えた『ともだち展』では、この20年の間、絵画交流は一度も途切れたことがありません。ここでは、20年も継続しているからこそのエピソードを紹介します。

12年越しに出会った『ともだち展』の卒業生

02年から『ともだち展』に参加している平壌のルンラ小学校では、07年以降、日朝関係の悪化によって絵は展示できない状況が続いていましたが（交流は継続）、14年に一時的に絵画展が再開できました。そのときに、私たち日本からの訪問団に通訳として同行してくれたのが、当時、平壌外国語大学の学生だったチョさんでした。チョさんはルンラ小学校の卒業生で、なんと平壌側での『ともだち展』の参加者だったのです。

後輩にあたるルンラ小の子どもたちに、彼女は語りかけました。「小学校4年生のときに、初めて『ともだち展』に参加しました。私が初めて会った外国人が、『ともだち展』で訪朝してきた日本人でした。それがすごく記憶に残っていて、日本人と直接話してみたいという思いで、これまでずっと日本語を勉強してきました。今は大学の日本語学科に所属していて、今回は通訳として同行しています」

またこの時の訪朝には、子どもの頃に日本で『ともだち展』に参加した日本人大学生と朝鮮大学校の大学生も同行していました。「絵を通してのみ出会っていた」チョさんと彼女たちが、12年の時を経て、ようやく「実際に出会えた」のです（写真）。

東北アジアをめぐる情勢は相変わらず厳しいですが、「顔が見える関係」を築くことが平和につながると私たちは信じています。チョさんは今、平壌外国語大学で教員となり、学生たちに日本語を教えているそうです。

『ともだち展』の「卒業生」が一堂に会した瞬間。
写真左側2名が日本からの訪朝者、右から2人目がチョさん

私とJVC

1980年の春、代々木のオリセンにできたJVCを訪ねた。GWにはカオイダンへ行った。以来、ロゴを作ったりイベントをしたり。アフガンナイトの際、安藤桃子・サクラの姉妹が舞台裏雑用係をやってたの知ってますか？　**高島 哲夫［ほぼ最古参の会員］**

合宿では、これまでの発想の殻を破るため、スタッフの一人ひとりが「もし資金や人材の制約を一切取り払ったら、自分はどんな活動をやりたいか」を発表

私とJVC

ラオスボランティアチームに参加して25年。酒ばかり飲んでいてJVCの役に立たなかった。でも、普段の生活では出会えない人と毎週ラオスのようなマイナーな国のニッチな話ができる空間が存在することは極めて貴重だと思います。 山口 敏彰［ラオスボランティアチーム］

［報告］JVCの未来を決める!

「ゼロベース」で新たな取り組みを

JVCは40年間にわたり世界各地で活動を展開している。だがここ10年に限れば、世界情勢は変化すれど、海外で新たな事業を立ち上げていない。JVCは何を目指すのか？　昨年、私たちは5日間にわたる合宿でそれを徹底討論し、今年は海外の駐在員と本部のスタッフとが集まる「代表者会議」を開催し、今こそ取り組むべき事業を詰めていく。JVCの新たな発信を注視してほしい。

JVC代表
今井 高樹

40年間で劇的に変わった世界に対応できているのか？

昨年、カンボジアを訪問した。20数年ぶりの首都プノンペンはビルが林立していた。JVCが事務所を設立した1980年代のカンボジアを知る人なら、同じ街とは思えないに違いない。

JVC誕生からの40年で、世界は劇的に変化した。冷戦終結、グローバリゼーション、対「テロ」戦争。米国の単独覇権は、中国をはじめ新興国の台頭に代わられつつある。富は一極集中し格差は拡大。自国優先主義や排外主義が広がっている。

80年当時、誰がこのような「40年後」の世界を想像しただろうか。

設立以来、JVCはそれぞれの時代において確かな活動の足跡を残してきた。外部の方々からいただく評価も決して低いものではない。

とはいえ、今のJVCが果たして変化に対応できているかは少々心もとない。この10年、国内での被災地支援を除けば、新しい国での事業を立ち上げていない。その現状は「組織の硬直化」と指摘されるかもしれない。数年も続く収支マイナスの年間決算は正味財産の減少を招き、先行きを危ぶむ声も少なくない。

そうした危機感がスタッフで共有されるにつれ、組織的課題についての議論が始まった。JVCは何を目指し活動するのか？　どうやってより多くの支援を集めるのか？　限られた資源をどう使い「JVCらしい」活動を行うのか？

昨年夏、海外駐在員も含むスタッフが一堂に会し、理事も参加し、4年ぶりの「合宿」が開催された。5日間にわたる議論は、「そんなに長く顔を突き合わせて話すのですか？」と他団体に珍しがられた(笑)。その内容を紹介したい。

JVCに来て最初の会議でスタッフが支援の在り方をめぐって大ゲンカ。とんでもないところに来たなと思いつつ、真摯に課題に向き合い、思いをぶつける姿に圧倒されました。個人と組織が共に育つ場であり続けて下さい。 **高橋 清貴［調査研究・政策提言担当（90年代後半～）／現JVC専門アドバイザー（政策提言）］**

合宿でのグループワーク。「もし今年で事業が打ち切りになってもこれだけは残したい、という活動は何か」という仮定の質問に答えながら、JVCの活動の核になるものを探る

「商店街」的なJVCが新たに目指す価値とは

JVCという組織は「商店街」に例えられることがある。パレスチナ、カンボジア、ラオス…。それぞれの事業が個人商店のような独立した存在で、個々の「商店主」は自負と気概に溢れる一方、自分の店を守ることに一所懸命で商店街全体で一丸となるのは難しかったりする。

「商店街」的なスタイルには多くの良さがある反面、新しい事業やチャレンジへの障害になることもある。その時には、個々の商店の枠を取り払い「何を目指すか」を考え、限られた資金や人材をそこに投入する必要も出てくる。

では、JVCは何を目指すのか？

合宿ではワークショップを重ね、一人ひとりがなぜJVCに参加したのか、それぞれの活動地や活動分野で何を経験したかを語った。それは、それを掘り下げることで、場所や分野によるのではないJVCの活動の「核」を見出す作業だった。

その結果、JVCが実現すべき価値として「共生」（違いのある他者を認める社会）、「公正」（誰もの権利が尊重される社会）、「主権」、または住民主権」（自分たちの暮らしのあり方を自分たちで選ぶ社会）などを共通認識とすることができた。

「共生」や「公正」といえば、他団体も良く使う変り映えのない言葉にも思える。しかし、「共生」の背景には朝鮮半島での或いは日本国内の外国籍の方々との交流、「公正」にはイスラエルによって封鎖されたガザの現状、「主権」には大規模開発によって土地を奪われ抵抗する農民の姿などがしっかりイメージされている。

いったんシンプルな単語で「求める価値」を表現することで、逆にそこから、従来の活動地にこだわらず、世界の「どんな場所で」「どんな活動を」実施することでそれを実現できるかが議論できると考えた。

例えば、大規模開発の影響や圧倒的な社会的抑圧のもとで立ち上がる人々と連携する活動を通じて、「公正」や「主権」を実現するといったことである。

ゼロベースで事業の構想を練る「代表者会議」

こうした議論を踏まえ、今年いよいよ具体的国名や地域名を挙げ、3年後を視野に置いた事業構想を立てる。現在の活動国での事業ありきではない「ゼロベース」――「もしJVCがまったく新しい団体だったら、どこでどんな活動をするか」――での議論をしたいと考えている。

各国の駐在員と東京のスタッフが集まる「代表者会議」の場で、「今こそJVCが取り組むべき」事業の候補を互いに提案し、資金・人材といった組織の力量も考慮しつつ、候補を絞り込んでいく。喧々諤々の議論になりそうだ。

JVCにはこの40年間変わることのない基本姿勢がある。それは、現場において人々のより近くでともに活動をしながら、その背景にある社会の構造的な問題を理解し、日本や国際社会も含め広く訴えること、場合によっては政策提言にもつなげていくことである。

JVCの役割について、ある人が「違う風景を見せること」と言ったことがある。言い得て妙だと思った。社会経済のありようを常に複眼的に見てきた私たちは、いわゆる「常識」とは少し違った視点を提供できるかもしれない。経済「発展」が果たして万能か？ 朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との関係をどう考えるか？ それらについて、私たちは活動から学んだことを発信してきた。

今回の新型コロナウイルスの拡散は、まさにグローバル化が進む社会の脆弱さを露呈させた。目まぐるしく状況は変化しているが、この危機においても、私たちは活動地、そして日本の現状を見ながら何かを発信する役割があるだろう。未来に向けて、ますますJVCの真価が問われてくる。

国境を超える市民参加は、いま始まったばかりである。国際協力市民活動は、地球社会において必然的行為であり、限りなく続くであろう。参加する人の実力を高め、他国の人のいじめを止めて、心豊かに生活したい。 岩崎 駿介［元代表（81～93年）］

スタッフOB/OGの現在

ここでは、たくさんいるJVCスタッフOB/OGのなかから
4名にご登場してもらい、いまの近況と、
JVCに関わる思い出を語ってもらった。

居酒屋でつなぐ人と地域と世界

居酒屋「百年の杜」店主／アジア農民交流センター事務局長／成城大学非常勤講師（元タイ駐在） 松尾 康範

僕が学生時代にJVCのボランティアに参加したのは1990年。97年にはスタッフとなり、2000年にタイで「地場の市場づくり」プロジェクトを立ち上げました。その間、アジア農民交流センターという農民NGOの事務局として、タイと日本の農民交流にも携わって来ました。

現在は学生時代から温めていた居酒屋のおやじになり12年。農民交流で知り合った生産者の方々から食材を仕入れ、野菜や魚は地場の市場づくりと同様のコンセプトで地産地消。細々ではありますが、タイとの交流も継続しております。

組織に忠誠心を持って生きる事なんてできない人間に思われてしまうこともありますが、僕はいつまでもJVCのメンバー、という気持ちを思い続けております。居酒屋経営においても、それは目的ではなくツールとして、JVCなどで学んだ事を社会にどう還元する事ができるか、というような事ばかり考えておりますので、利益が伴わず自転車操業…。

という事で、同情を乞う宣伝。ぜひ皆様、この騒動が落ち着きましたら三浦半島に遊びに来たついでにでも「百年の杜」にお立ち寄り下さい。自著『居酒屋おやじがタイで平和を考える』（コモンズ）もご笑覧くださいね。JVCの活動の意義や感謝の気持ちをそこに綴っております。

最後になりましたが、40周年おめでとうございます。こうしてJVCと今でもつながることができ、大変光栄に思っております。

いつも人の輪に励まされて

ダンスインストラクター（元広報／カレンダー事務局） 荻野 洋子

1990年だったか、新聞の「JVC国際協力カレンダー」の案内を見て事務所まで足を運んだのが事の始まりです。JVCで出会う方はみんな個性豊かで、だれもが社会への問題意識と自分のやりたいことがしっかりあるようでした。

ここで私ができることは…？こんなステキなJVCを支えること。お金をつくること。生まれもって営業とか売ることが好きで、縁あって国際協力コンサート事務局として活動することに。紹介状をもって丸の内界隈の企業を訪れて寄付のお願いをして回るのはおもしろかった。その後は、広報担当として『知っておきたい地球の課題』というテーマで約半年の連続講座を企画。これが数年続きました。分野違いの、同じ意識を持った方々が仲間になりました。

そして、数字が出る仕事がしたくてカレンダー担当に。年々商品も増えて複雑になっていく発送業務を支えてくれたのが「カレンダーボランティアチーム」。ここでも皆さんが主体的に発送を担ってくださいました。

今はアフリカンダンスのインストラクターをやっています。毎週土曜日、ママ年代の方中心に20～30人ぐらいが集まって楽しんでいます。私自身、アフリカンは50の手習いですが、ここでも輪が広がって、感謝！

古希もそう遠くない今、いつまで続けられるかわかりませんが、忙しい日常をおくるみなさんの週末の清涼剤になれば、リズムのシャワーでお役に立てれば幸せなことです。

「NGOとODAとでは、出会う人が違う」岩崎駿介さんや柴田久史さんが喝破したこの言葉が私のJVCの20年であり、今も変わらぬ活動の指針です。これからもJVCだからこその出会いと協働をつくっていってください。 壽賀 一仁［エチオピア駐在（90～93年）、エチオピア事業担当ほか（94～10年）］

いま、なにしていますか？

「しらけず、あきらめず」続けたい

保育士（元コンサート事務局） 石川 朋子

保育士の1年目を終えました。JVCの卒業生になった今、なる前からもそうでしたが、大事にしている言葉があります。JVC30周年大同窓会のときに、寄せられた「はまさん」のメッセージです。「JVC卒業生の、日本での仕事は、自分の生活を維持することのみに終始することなく、できる限りこの社会を、人間と自然にとってより良いものにすることです。一人ひとりの力は小さくとも、しらけたり、あきらめたりせずに、こつこつ積み重ねてゆけば、それを日本全国の町や村でやってゆけば、大きな力になってゆく筈です。あおくさいといわれようと、信念を捨てたら死んだも同然です。皆さん棺の蓋を閉じるまで元気にがんばりましょう」。

大学3年のとき、国際協力コンサートでJVCと出会い、それ以降、会員、ボランティア、スタッフと様々な関わり方で20年以上JVCの活動に参加してきました。そこに集う人たちが好きで、そこで過ごす時間が楽しくて、「現場を大事にし、ものを言うJVC」に共感していました。

写真左上

1年前の今ごろは、担当が0才児クラスになり、命と向き合う緊張感と、慣れない保育で、疲労困憊の日々でした。JVCの「じぇ」も国際協力の「こ」の字もない生活になりましたが、日々保育の現場でも、「考えて、おかしいと思うことには、恐れず声をあげる」という、JVCで学んだ姿勢を実践しています。いつも、はまさんの言葉や、JVCの仲間たちが心にいます。私の現場は保育園。これからも現場で精進していきます。

宿舎での笑い声を、ふと思い出す

ジャーナリスト（元ソマリア駐在） 樫田 秀樹

1985年から2年間、ソマリアで活動した。昔のJVCは大雑把な組織だった。私の海外協力経験ゼロは仕方ないにしても、事前研修もゼロ。現地に行けば、予定と違って「エチオピアからの新難民のための保健・給食事業をやって！」と難民キャンプに送られた。1日15時間労働で日業務をこなしたが、私の2年間の評価は自他共に高くはない。本当に自分でなければ？と今も疑問に思う。

ソマリア離任前、目標をもった。次は、砂漠ではなく森へ、日本人の日常生活と直結した地域に行こうと。JVCを離れた後の1989年、私はマレーシア・ボルネオ島サラワク州の熱帯林の村に入る。以後30回の訪問を重ね、日本人の木材、紙、植物油の消費が森を破壊する様を記録している。一方で、そんな窮状でも、家族は家族として、地域は地域としてたおやかに生きる先住民族の姿に多くを学んでいる。

ここ数年は「足元にいる難民」を取材中だ。母国の弾圧を逃れ日本で難民申請すれど、家族にも会えない長期収容を強いられ、労働を禁止され、遠い国の難民を支援する人たちも知ることがない人たち。

どの取材も、私という個人が蓄積してきた信頼と人脈によるものとの自負はある。ただ、取材もチームでやりたいと思う時がある。治安上、宿舎と現場だけの生活を強いられたソマリアで、チームとして働いたあの充実感や一体感を不意に思い出すときだ。あの夜、暇があれば皆で「大貧民」に興じたのは今も懐かしい。

編集部注：樫田さんは現在本誌T&Eの編集も担当されています。

編集部より①

今回の欄外メッセージ「私とJVC」が面白すぎたので、かじのさんにイラストを描いてもらった

イラスト　かじの倫子

どうも。本誌編集部の細野です。今回はJVC40周年記念号ということで、いろいろ特別な記事を掲載しているわけですが、その編集会議の場で「単に普通の記事を並べていくだけだと、これまでJVCに関わってきているたくさんの皆さんの声を拾いきれないなぁ」という思いが出てきて、それではということで、『私とJVC』と題して、だいたい100文字くらいのメッセージをなるべく多くの関係者の皆さんからいただいて、ページ欄外ではあるけれど掲載してみてはどうだろう、ということになりました。

（こんなに短い文字数で皆さん書いてくれるかなぁ）と心配していたところ、多くの皆さんにご快諾いただいて、今みなさんがご覧になっているメッセージをいただけました。普通の記事のみならず、今回はぜひページ欄外にもご注目ください。ここでは、それらの中から、特に3つのメッセージを選んで紹介します。

福田 直美
パレスチナ駐在（00年代）

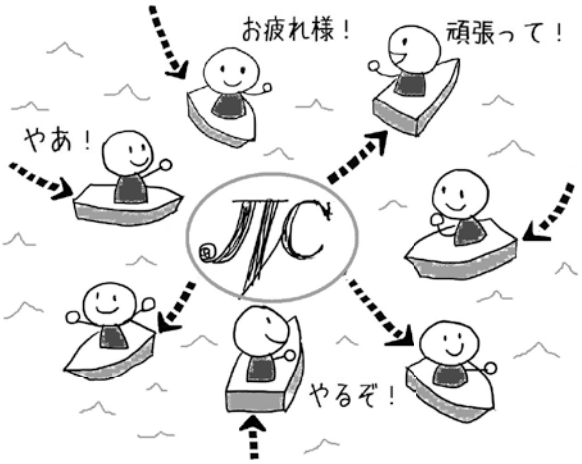
冷房の使用を極力避けるため、震災後の事務所移転の際は「窓を開けられる」が条件の一つでした。以前の丸幸ビルでは、お客様が来たら冷房が入り、皆密かにホッとするという場面も。地球温暖化、どうにかしないとですね!

編集部より　現地駐在として依頼したのになぜかエピソードは東京事務所（笑）。確かに、以前の事務所は、夏は暑かった! それだけ頭に強烈に残っていた、ということでしょうか。

山口 誠史
ソマリア駐在（80年代）、カンボジア現地代表（90年代）

昔のJVCでは、みな仕事としてやっているという意識はなく、世界の矛盾をどうするかを熱く語り合う大学のクラブ活動のような雰囲気でした。これからもJVCが社会を変革する運動体として活躍することを期待しています。

編集部より　JVCに関わる人のスタンスみたいなものをよく表している気がします。昨今の流行（?）でもある、「仕事としてのNGO活動」になりすぎないように引き継いでいきたいものです。



竹村 謙一
英語ボランティアチーム

昔の仕事場の近くに「ル・ポール」という喫茶店がありました。フランス語で「港」という意味です。いろいろな人が立ち寄っては去って行く、港に集まる船のようで素敵でした。JVCもそんな場所かもしれません。

編集部より　なんという素敵なメッセージ! 普段のボランティア活動を通してJVCの雰囲気をよくご存知で、かつスタッフ自身からは出てきづらい、ちょっと離れた視点からの切り取り方ですね。

JVCエチオピア救援の際、最も飢えた村を訪ねた。食料を携えた私たちは村人から襲われることを恐れていた。ところが逆に最後に残った食べ物を振る舞ってくれた。飢えてなお客人をもてなす辺境の民の心に感動した。

林 達雄［元代表（93～95年）］

編集部より②　読者の皆さんにお願い

お待ちしています！ エコにもなる「モノでの支援」とボランティア

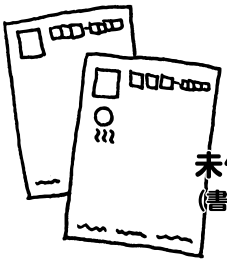
JVC東京事務所には、封筒や宅急便が日々続々と届いています。中身は…日本中から集まる、使用済み切手やテレホンカード、書き損じハガキ、外国の紙幣やコイン。実はこれらの品々、コレクターの皆さんに買い取っていただくことで、活動の資金へと生まれ変わるのです。

ご自宅の引き出しに眠っているものを、ぜひ活動のためにお送りいただけませんか？

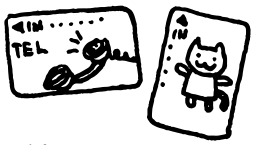
モノでの支援

未使用・使用済みの切手

外国のお金（紙幣・コイン）



未使用の官製ハガキ（書き損じもOK）



使用済みテレホンカード
オレンジカード、イオカード

ボランティア

東京事務所で寄付品の仕分けをしてくださるボランティアさんも大募集しています！（平日10～18時）

JVC ボランティア係　03-3834-2388
info@ngo-jvc.net

送付先　JVC東京事務所
〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4
クリエイティブOne 秋葉原ビル 6F
JVC 物品支援 係　03-3834-2388
※送料のご負担にご協力ください

https://ngo-jvc.info/collect　JVC モノを集めて送る で検索

不用品を業者さんに買い取っていただき、その分をJVCに寄付する支援もあります。ご自宅の整理などで、ぜひご協力ください！

送付先はJVC事務所ではなく、各業者さんになります。それぞれ異なるため、ウェブをご覧いただくか、JVCまでお問い合わせください。

本・コミック・CD・DVDなど

本・CD・DVDを送る
本で寄付

読まなくなった本、聴かなくなったCDや使わないDVD・ゲームを箱に詰めて、無料の集荷を申し込んで送るだけ。査定額+10%が寄付になります。

本は30点以上、その他は5点以上でお送りいただけます。

お申込はウェブのみ

腕時計・アクセサリー類

不用品を送る
お宝エイド

壊れてしまったアクセサリー、使わないカメラなど、ご自宅に眠る不用品の査定額+10%が寄付になります。梱包後、集荷依頼をして着払いで送るだけ。

カバン・ファッション・小物

ファッションアイテムを寄付
ブランド・プレッジ

洋服やバッグ、ハンカチ、靴など、使わなくなったアイテムを寄付できます。取扱いブランドは7,000件以上、一流ブランドだけではなくカジュアルなブランドも買取可能です。

お申込はウェブのみ

大野 和興
農業記者。1940年生まれ。四国山地のまっただ中で育ち、村歩きを仕事として日本とアジアの村を歩く。村の視座からの発信を心掛けてきた。著書に『農と食の政治経済学』(緑風出版)、『百姓の義ームラを守る・ムラを超える』(社会評論社)、『日本の農業を考える』(岩波書店)、『食大乱の時代』(七つ森書館)他。

激動の時代をT&Eと共に歩んで

本誌編集長　大野　和興

長年本誌の編集長を担っていただいた大野和興氏だが、ご本人の希望から今号で勇退。目の前の活動に注力しがちなJVCスタッフたちに、過去から学ぶこと、未来に備えること、今の課題を真剣に捉えること、そしてそれらに並行して取り組むことの大切さを伝えていただいた。

「その時なにができるか」現場をもとに考えてきた

ぼくが本誌『Trial&Error』の編集に関わるようになったのは1990年代半ばでしたから、かれこれ25年ほどになるでしょうか。月刊の時代、スタッフだった岩崎美佐子さんが何役も抱えて忙しそうだったので、「手伝おうか」と言ったのが発端で、それがここまで続いてしまったのです。ちょうど80歳になりました。これ以上続けると、老害もいいところになってしまいます。本当にお世話になりました。

この25年は、実にいろいろなことがありました。この激動の時代を世界で活動するJVCの仕事に関わりながら過ごすことができたことを、本当にありがたく、幸せなことだったと、心から感謝しています。

90年代半ばといえば東西冷戦が80年代末に終わり、世界市場が一つになって、グローバリゼーションが本格的に展開されるときでした。GATTに代わってWTO(世界貿易機関)が発足するのが1995年、世界は急速に変わりました。モノ、ヒト、カネが世界を自由に行き来するようになり、生命や文化、人権などがすべてカネに換算されて商品化されるという時代に突入、世紀をまたいで世界の混乱が激化します。自然破壊と難民とテロ、そして対テロと称する殺戮の時代に入るのです。

そこに天変地異が起こります。国内では東日本大震災・原発の破裂が起こり、世界的にも大災害が続発します。

そのときJVCは何ができるのか、何をしなければならないのか。T&Eはそのことを検証し、国内/海外の活動現場とともに考えることを編集方針の柱に据えました。私自身についていえば、編集に関わる皆さんとあれこれを議論することを通して、物事を見る視点の置き方、時間軸の幅と長さのとり方、などを含め、ずいぶん勉強させてもらいました。毎回の編集会議に出させてもらうことが楽しく、その日の朝はうきうきしたものです。

いま、世界を襲っている新型コロナウイルスは、現代社会の在りようそのものに見直しを迫っています。私たちはどこで間違ってしまったのだろう。そのことを検証し、この先を構想する作業は、JVCにとって欠かせない作業だと思います。T&Eの発行体制は隔月刊、季刊と移り変わりましたが、課題の深堀りと内容の充実ぶりは素晴らしいものがあると常々感じています。これからのご健闘を期待します。

これまで歩いてきた道をまた

私事ですが、首都圏の山間地秩父に住んでやはり25年ほどになります。仲間と種取りをしながら雑穀や地種の大豆、小麦などを作り、近所にある特別支援学校の子どもたちと農作業をやり、できたものを直売所を作って売ったり、ということに、連れの農業ジャーナリスト西沢江美子とともに熱中しています。時間をつくり、当てのない手探りの旅に出かけようとも思ったりしています。これまで60年近く歩いてきた村を再訪し、人に会い、空気に触れ、とりとめもなく考える、そんな旅をしたいのです。

どうか時間をつくり、秩父にお出かけください。

投稿募集中

JVCや会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。
また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎！
JVCの会員になったきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいことなど、800字以内でお送りください。
皆様からの投稿をお待ちしております！

投稿先 会員担当 横山まで
Email：yokoyama@ngo-jvc.net
FAX：03-3835-0519

「冬の募金」報告

※指定寄付／無指定寄付すべてを含みます

2019年「冬の募金」へご協力いただき、ありがとうございました！

11月5日～2月28日

1,054件　9,371,221円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間（12～2月）
無指定	17,824,086
タイ	1,500
カンボジア	7,034,500
ラオス	1,619,000
南アフリカ	1,410,034
アフガニスタン	1,974,026
イラク	142,475
スーダン	1,046,323
南スーダン	12,500
パレスチナ	1,329,855
コリア	545,250
東日本大震災	500
モザンビーク緊急支援	9,433
ラオス洪水被害支援	178,000
みどり一本	123,946
東京管理	12,922
調査研究	3,000
合計	33,267,350円

※上表に「季節の募金（夏/冬/春）」も含みます。

第21回 JVC会員総会のご案内

**2020年度のJVC会員総会は
大変残念ですがご来場は見合わせて
委任状によるご参加を！**

当日の様子はインターネットで中継予定

2020年6月の会員総会ですが、ご存知のように新型コロナウィルスの感染が拡大している中、皆様の安全を鑑みると、6月の時点でも集会が困難であることが予想されます。よって今年は広い会場での開催を断念し、JVC東京事務所において**［最低限の人員にて開催］**いたします。

大変心苦しいのですが、つきましては、**［当日のご来場はご遠慮いただき］**、本誌同封の**［委任状の返送］**をもって会員総会への参加とみなしていただきますよう、ご理解とご協力をお願いいたします。議案書は6月初旬発送予定です。質問状を同封いたしますので、ぜひご返送にて議題へのご意見をお寄せください。

また、**［当日の様子はインターネットで同時中継］**の予定。議決には参加できませんが、質問・コメントをしていただけます。JVCのより良い活動・運営のため、ぜひ視聴という形でご参加ください。

日　程：2020年6月13日（土）10：00～13：00（予定）
場　所：JVC東京事務所
議　案：1）2019年度活動報告および決算報告
　　2）2020年度活動計画および予算案
　　3）定款変更
　　4）役員改選

人事

異動

木村　茂　広報担当（ラオス事業担当より：4月1日付）

退職

渡辺　真帆　パレスチナ事業担当（3月31日付）
菊地　真歩　KOREAこどもキャンペーン事務局（3月31日付）

編集後記

ここまでコロナが社会問題になるとは思わなかった。もっと言えば、我が身に降りかかる不安になるとは想定外だった。果たしてフリーランスの私は救済されるのか？　感染も怖いが、政府の無策がもっと怖い。マレーシアの知人によれば、収入に応じた一時給付金は4月上旬から支払われ、低収入層は、毎月、1年にわたり最低限の生活費が支給されるとか。コロナ問題からは、その国がいかに国民を大切にするか蔑ろにするかの国力が見えてくる。（樫）

Trial&Error　トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）
2020年5月10日発行（通巻340号・年4回発行）　定価 500円（税込）

TRIAL& ERROR

40年目も、この先も、みんなの手で支援を届けるために。JVCでは、仲間を募集しています。

一人ひとりの力が集まれば、世界を変えられる。
私たちはそう信じて皆さまとともに歩んできました。
あなたの思いが、誰かの未来を照らす力になります。
ご自身にあった方法で、
国際協力の輪を一緒に広げてください。
まわりの方への紹介も大歓迎です!

いつでも募金

お好きなときに、お好きな金額をご寄付いただけます。ウェブサイトからクレジットカードでご寄付いただくか、郵便局からのお振込が可能です。

口座番号
00190-9-27495「JVC東京事務所」

マンスリー募金

毎月500円から無理のない金額で始められる自動引落し募金です。支援する国をご自分で指定することも可能です。クレジットカードや銀行口座をご利用いただけます。申込はウェブサイトか、お問い合わせください。

ウェブサイトからの募金

https://ngo-jvc.info/donation　JVC寄付をする　で検索

ご遺産からの寄付

「自然と人を大切にする社会を、次世代に残していきたい」。そんな思いから、ご自身、またはご家族の遺産やお香典をご寄付としてJVCに託したいというお問い合わせが増えています。資料の送付や相談も行っています。お気軽にお問い合わせください。

ボランティアになる
モノを寄付する

ご自宅でもう使わないものが、支援になります。また、JVCではボランティアを募っています。今回の新型コロナウイルスの影響がおちつきましたらぜひご協力ください。
詳細は本誌の33ページをご覧ください。

JVC 東京事務所　〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル6F
TEL 03-3834-2388　FAX 03-3835-0519　E-mail info@ngo-jvc.net　ウェブサイト https://www.ngo-jvc.net

特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数（4月1日現在）　合計925名（正会員526名　賛助会員399名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。
入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の横山まで。
メールアドレス yokoyama@ngo-jvc.net

- 一般会員　10,000円
- 学生会員　5,000円
- 団体会員　30,000円

それぞれに正会員と賛助会員があります。

JVCのオリエンテーションにご参加ください

活動内容をご紹介する説明会を開催しています。
お申し込みはウェブサイトからお願いします。

［会　場］
JVC東京事務所，オンライン
参加費無料

ウェブサイト https://www.ngo-jvc.net/　メールアドレス info@ngo-jvc.net　NGOJVC　@ngo_jvc　@ngo_jvc

◎発行 ＝ 日本国際ボランティアセンター（JVC）〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519
◎発行人 ＝ 今井高樹　◎編集人 ＝ 大野和興・長谷部貴俊　◎編集スタッフ ＝ 樫田秀樹・並木麻衣・細野純也
◎デザイン ＝ 渡部健　◎印刷 ＝ 株式会社ベスト・プリンティング
本誌の記事・写真などの無断転載・複写を禁じます。